

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

農村総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

あな くら
穴倉遺跡

2009年3月

鹿児島県志布志市教育委員会

序 文

志布志市は、平成18年1月1日に松山町・志布志町・有明町の三町合併で誕生した市であります。

本市には多くの文化財が存在し、埋蔵文化財の包蔵地についても前川・安楽川・菱田川を中心に500ヵ所を超える多数の遺跡が確認されています。特に前川・安楽川沿いに縄文時代の遺跡が多いことから「縄文銀座」と称されるほどです。また一方で、志布志は古くから港町として栄え、交易の拠点、交通の要衝として繁榮し、麓地区には多くの武家庭園・寺院庭園が遺されています。これらの庭園のうち、天水氏庭園・平山氏庭園・福山氏庭園は「志布志麓庭園」として国指定名勝となり、鳥濱氏庭園と清水氏庭園は国登録名勝となっています。さらに、志布志をめぐる興亡の歴史を示す中世山城の志布志城跡も国指定史跡に指定されています。

この報告書は、旧有明町教育委員会が主体となって、平成9年度において全面調査を行った成果を志布志市教育委員会がまとめたものであります。

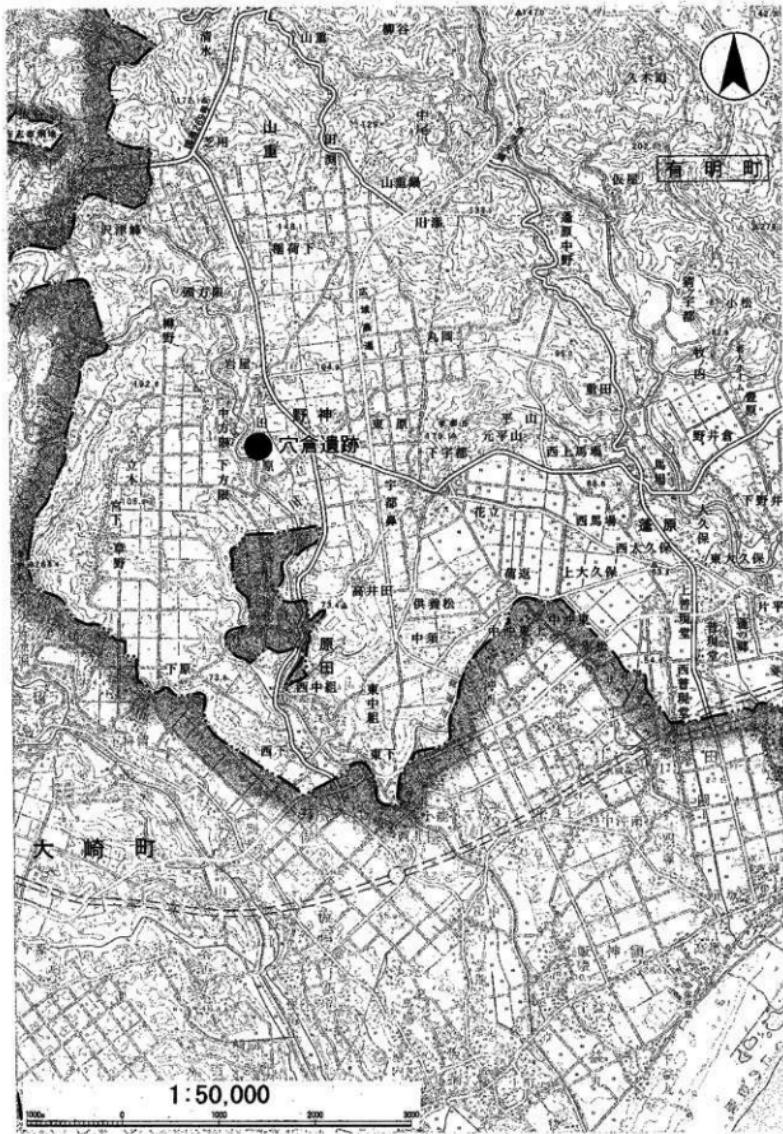
調査の結果、穴倉遺跡からは弥生時代の遺物・遺構及び古墳時代の遺物が多数確認されています。

この発掘調査の成果が、今後の研究資料として活用されるとともに、広く文化財愛護思想の啓発普及等、地域の文化財として地域の文化財として活用され、文化財に対する理解を一層深めることができればと願っております。

最後に、発掘調査に従事していただいた住民の方々をはじめ、現場における調査から出土資料の整理・報告書の刊行に至るまでご指導・ご協力いただきました県教育委員会文化財課をはじめとする各関係機関、その他、多くの先生方並びに関係者の方々に深く感謝申し上げ、刊行の序文といたします。

平成21年3月吉日

志布志市教育委員会
教育長 坪田勝秀



穴倉遺跡の位置

穴倉遺跡 墓藏文化財発掘調査報告書 目次

序文
穴倉遺跡の位置
例言・凡例

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の組織	
第3節 試掘調査の成果	
第Ⅱ章 遺跡の位置及び構成	3
第1節 志布志市の概要	
第2節 地形的環境の概要	
第3節 遺跡周辺の歴史的環境	
第Ⅲ章 全面調査の概要	6
第1節 全面調査の方法	
第2節 墓位	
第3節 全面調査の概要	
第4節 考収調査の成果	
1 弥生時代・古墳時代の調査	
2 出土遺物	
第Ⅳ章 調査のまとめ	35
第1節 遺物	
第2節 遺構	

図版
報告書抄録

図 版

第Ⅰ章	
第1図 穴倉遺跡 試掘調査遺物	2
第Ⅱ章	
第2図 穴倉遺跡 周辺遺跡位置図	4
第Ⅲ章	
第3図 穴倉遺跡 グリッド設定図	7
第4図 穴倉遺跡 遺物出土状況 全体図	8
第5図 穴倉遺跡 樹立柱建物1 平面・断面図	9
第6図 穴倉遺跡 Ⅱ層上面露出 情報配置図 (H-K-4・5区)	10
第7図 穴倉遺跡 土坑1 平面・断面図	11
第8図 穴倉遺跡 Ⅱ層上面 情報配置図	12
第9図 穴倉遺跡 弥生土器 1	16
第10図 穴倉遺跡 弥生土器 2	17
第11図 穴倉遺跡 弥生土器 3	20
第12図 穴倉遺跡 弥生土器 4	21
第13図 穴倉遺跡 弥生土器 5	22
第14図 穴倉遺跡 弥生土器 6	24
第15図 穴倉遺跡 成川式土器・内黒土器・陶器	26
第16図 穴倉遺跡 Ⅱ層出土 弥生土器・成川式土器 遺物出土状況図 (B~F-1・2区)	27
第17図 穴倉遺跡 Ⅱ層出土 弥生土器 成川式土器 遺物出土状況図 (F-K-4・5区)	28
第18図 穴倉遺跡 Ⅱ層出土 弥生土器・成川式土器 遺物出土状況図 (I-4区)	29
第19図 穴倉遺跡 石器	30
第20図 穴倉遺跡 Ⅱ層出土 石器出土状況図	30

表

第Ⅰ章	
第1表 穴倉遺跡 試掘調査遺物 土器観察表	2
第Ⅱ章	
第2表 穴倉遺跡周辺遺跡一覧	5
第Ⅲ章	
第3表 穴倉遺跡 樹立柱建物1 チート表	11
第4表 穴倉遺跡 樹立柱建物1 内検出 土坑1 チート表	11
第5表 穴倉遺跡 弥生土器 要1~7類 土器観察表	31
第6表 穴倉遺跡 弥生土器 要(延) 1~3類	
土器観察表	31
第7表 穴倉遺跡 弥生土器 要1~7類 土器観察表	32
第8表 穴倉遺跡 弥生土器 要(延) 1~4類	
土器観察表	33
第9表 穴倉遺跡 弥生土器 伴1~3類 土器観察表	33
第10表 穴倉遺跡 弥生土器 高环1類 土器観察表	33
第11表 穴倉遺跡 弥生土器 大腰1~3類 土器観察表	33
第12表 穴倉遺跡 弥生土器 小型土器1~2類 土器観察表	34
第13表 穴倉遺跡 成川式土器 土器観察表	34
第14表 穴倉遺跡 内黒土器 土器観察表	34
第15表 穴倉遺跡 陶器 土器観察表	34
第16表 穴倉遺跡 Ⅱ層出土石器 チート表	34

図 版

図版1 穴倉遺跡 全面調査	
図版2 穴倉遺跡 弥生土器 1	
図版3 穴倉遺跡 弥生土器 2	
図版4 穴倉遺跡 弥生土器 3	
図版5 穴倉遺跡 弥生土器 4	
図版6 穴倉遺跡 成川式土器・内黒土器・陶器	

例　　言

- 1 本報告書は、農村総合整備事業の事業実施に伴い旧 有明町教育委員会（現 志布志市教育委員会）が実施した発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、旧 有明町役場耕地課の委託を受けて旧 有明町教育委員会が実施した。
- 3 穴倉遺跡の調査は、本調査を平成9年度に行なった。整理作業・報告書作成は平成20年度に行い、鹿児島県教育庁文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターに指導・助言を得た。
- 4 掘図の縮尺は、各図面に示した。
- 5 発掘調査における写真撮影は中水 忍（旧 有明町教育委員会（当時））が行い、遺構図面の作成は中水 忍・猪ヶ宇都敏江（旧 有明町教育委員会（当時））が行った。
- 6 発掘作業の実施にあたっては、周辺地権者のご理解と地元作業員のご協力により円滑に行なうことができた。
- 7 整理作業を川ノ上真理、安野美子、山元弓枝（志布志市教育委員会）で行った。
- 8 出土遺物の管理・保管は志布志市教育委員会で一括して取り扱い、今後文化財の啓発・普及に活用したい。

凡　　例

- 1 本報告書に用いたレベル数値は、旧有明町役場耕地課が提示した事業実施計画図面の数値に基づくものである。
- 2 本報告書の土色・土器の色調について、数字及び英字で表記されているものは、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖 2001年版」に準じて表記している。
- 3 遺物番号・各遺構番号は全て通し番号とし、本文及び掘図・図版中の番号と一致する。
- 4 周辺遺跡一覧に表記してある番号は「周知の埋蔵文化財包蔵地」として登録されている遺跡番号と対応する。
- 5 遺構の長軸方位は南北方位では北を、東西方位では西を基調にして文章中に表現している。また、文章中にある遺構の方位の解釈は以下のとおりである。
例) N 6° E → 北から東方向に 6° ずれる
- 6 図面上にある遺物マークについては、下記のとおりに分類した。
土器 ■ 石器 ◎ 石 ○ 軽石 ●
- 7 図中の方位は一部で磁北を使用している。磁北の場合は「MN」と標記している。
- 8 土器観察表中に表記してある胎土の分類については、肉眼観察によるものである。胎土の分類標記は下記の略号を用いている。
「石・長」→石英・長石　「雲」→雲母　　「角・輝」→角閃石・輝石
「礫」→小礫　「赤」→赤褐色粒　　「砂」→砂粒
なお、「小礫」については直径2mm以上の粒状のもの、「砂粒」については直径2mm未満の粒状のものを指す。

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

有明町耕地課（以下「町耕地課」）は、有明地区において農村総合整備事業を計画したが、同事業区は鹿児島県農政部農地建設課（以下「県農政部」）所管の県営シラス対策事業（東原地区）と重複しており、県農政部が事業区内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化財課（以下「県文化財課」）及び有明町教育委員会（現 志布志市教育委員会 以下「旧町教育委員会」）社会教育課（以下「町社会教育課」）に照会した。

この分布調査の結果をもとに、県農政部、県文化財課、町社会教育課は、埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行った結果、事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下「確認調査J」）を実施する必要があるという結論に達した。しかし、町耕地課が確認調査実施前に農村総合整備事業に着手したため、緊急に事業区域内に重機による6ヵ所の試掘トレンチを設定し、調査したところ3つの試掘トレンチで遺物包含層が確認されたため緊急に全面調査を実施することとなった。

全面調査は、町耕地課からの受託事業として、旧町教育委員会が調査主体となり県立埋蔵文化財センターの協力を得て、平成10年1月19日から平成10年2月13日まで(17日間)実施した。調査面積は750 m²である。

第2節 調査の組織

〔試掘調査・全面調査〕 平成9年度

調査主体者 有明町教育委員会

調査責任者	〃	教 育 長	大脇 茂夫
調査事務局	〃	社会教育課長	高崎 成行
	〃	社会教育課長補佐	
		兼社会教育係長	上村 宗市
	〃	社会教育課主事	黒川 晃
調査担当	〃	社会教育課主事	中水 忍
		県立埋蔵文化財センター 文化財主事	堂込 秀人

〔報告書作成〕 平成20年度

調査主体者 志布志市教育委員会

調査責任者	〃	教 育 長	坪田 勝秀
調査事務局	〃	生涯学習課長	小辻一海
	〃	文化財管理監	米元 史郎
	〃	文化財管理室長	竹田 孝志
	〃	埋蔵文化財係長	小村 美義
	〃	主任 主査	出口順一朗
	〃	主任 主査	大窪 祥晃
	〃	主任 补	相美伊久雄
	〃	主任 补	上集一樹
調査担当者	志布志市教育委員会	主任 主査	出口順一朗

第3節 試掘調査の成果

緊急に行われた試掘調査により、3つの試掘トレンチから弥生土器・成川式土器が確認された。出土した中から5点の遺物を実測・図化した。

(1) 弥生土器 (第1図 1・2)

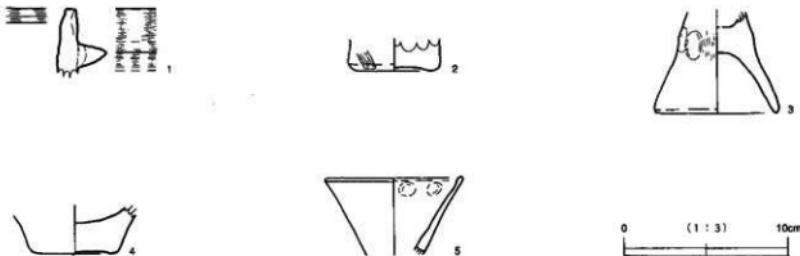
1は大甕の口縁部である。器壁が厚く、口縁部はほぼ直立し、口縁部の下位に突帯を施す。2は甕の底部である。比較的小振りの底部で、底部が僅かに上底を呈する。

(2) 成川式土器 (第1図 3～5)

3は甕の脚部である。器壁が薄く比較的小型の甕と思われる。脚は作り付けたものであり、直線的に伸び、端部は丸く收まる。4は甕の底部で、平底である。5は高坏の口縁部と思われる。器壁が薄く、口縁部は大きく開いて直行し、調整は粗である。

第1表 穴倉跡 試掘調査遺物 土器観察表

調査 番号	番号	往記 番号	出土区 域	層構 造	部位	分類	胎 上				本文・調査 上段：外底 下段：内底	底径 (cm)	備考		
							厚	直 径	幅	深					
第1回	1	16	33T Ⅲ層	大型 甕	口縁部	井手七唇	○	○	○	—	STBR/6 褐色	ナヅ・ナヅ	—	—	3.0
第1回	2	—	27 9	甕	底部	井手土器	○	—	—	—	STBR/6 褐色	ナヅ	—	—	4.8
第1回	3	—	27 9	甕	脚部	成川式土器	—	—	—	—	—	—	—	—	1.8
第1回	4	—	50T 9 余杯	甕	底部	成川式土器	○	○	○	—	STBR/6 褐色	ナヅ・粗底压凸	7.2	6.2	内底に擦痕
第1回	5	67	33T Ⅲ層	高坏?	内縁部	成川式土器	—	—	—	—	STBR/6 褐色	ナヅ	—	—	4.7



第1図 穴倉跡 試掘調査遺物

第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

第1節 志布志市の概要

志布志市は鹿児島県大隅半島の東部、志布志湾奥のほぼ中央に位置し、東部は宮崎県串間市、西部は大崎町、北部は曾於市と境をなしその一部は宮崎県都城市と接し、総面積は 290 km² であり、大崎町内に 1.02 km² の飛地を有している。

第2節 地形的環境の概要

市周辺の地形は、全体として志布志湾に向かって緩やかな勾配となっており、平野部が極端に少なく、標高 100m のあたりから大きく南部の台地と北部の山岳・丘陵地帯に二分される。

南部の台地は安楽川・菱田川・田原川・肝属川などの緒川によって開析される標高約 20~100m の火山噴出物の台地（シラス台地）が広がり、「原（ぱる）」と表現される比較的平坦な台地が見られる。この台地を南北に貫流する河川に菱田川があり、この沿岸に河岸段丘が形成されている。この河岸段丘は三段階の段丘に大別され、第三段丘面は明治から昭和にかけて先人たちの開墾による野井倉開田・蓬原開田が拓がり、広域に跨る稲作地帯となっている。

北部から東部にかけては標高 100m のあたりから山岳地帯となり、宮田山（標高 520m）をはじめ、霧岳（標高 408m）、御在所岳（標高 530m）などの山岳・丘陵地帯が広がる地域で、中世層を基盤として準平原化の後、周囲の台地が形成されたものといわれ、山地の開析は相当に進み、火山灰台地面を除いてほとんど平坦を残していないため、起伏の多い丘陵が連なっている。そのため山岳・丘陵地帯の集落はこれまで谷間に点在していた。台地上においては地下水位がシラス下部の深い位置にあり、第三段丘面は集落等の形成が困難で開田以前まではほとんど利用されず、シラス下部あるいは降下軽石層を流动する浅層地下水の露頭される段丘面の末端（崖脚）からの自然湧水の有無が集落立地の重要な因子であった。

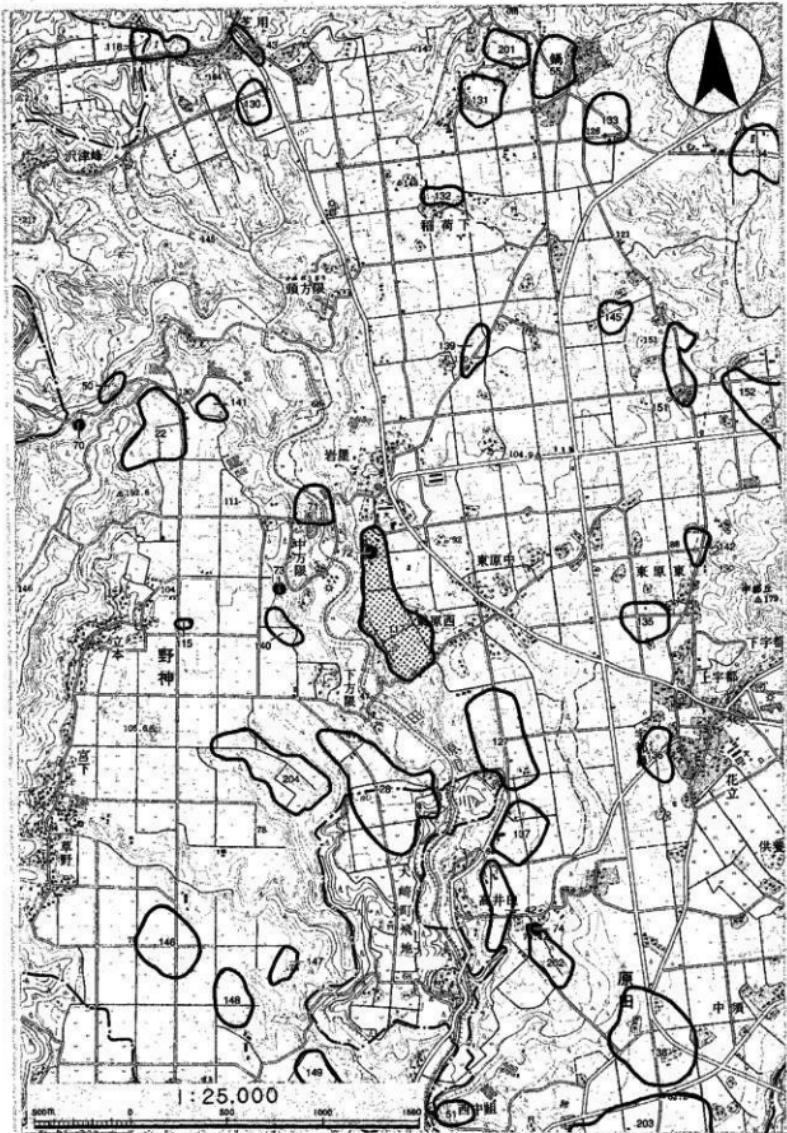
穴倉遺跡は市南部の火山灰台地の田原川沿いの台地上にあり、この台地は菱田川西岸の第三段丘面の一部にあたる通称「野神原（のがんばる）」の西端部（標高約 80m）に立地する。

第3節 遺跡周辺の歴史的環境

穴倉遺跡の周辺には複数の遺跡及び古墳群が存在する。平成 15 年度において同事業・同地区内の調査で石坂式、下剥峯式土器等の縄文時代早期の土器及び 2 基の集石、池田湖テフラ上面において 9 基の掘立柱建物が確認されている。穴倉遺跡が立地する台地の下を流れる田原川沿岸には、小規模ながら古墳群が複数存在し、岩屋古墳群〔71〕、中方限古墳群〔72〕、渡迫古墳群〔73〕等が確認されている。

【参考文献】

- 山口輝一、村上英治、中水昌、中村直子、内山和則：2008『志布志A遺跡、穴倉B遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（1）志布志市教育委員会
曾於町出土文物審査委員会：1988『曾於町可逆』曾於町教育委員会



第2図 穴倉遺跡 周辺遺跡位置図

第2表 穴倉遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所 在 地	地形	時 代	遺物・遺構等	備 考
22	牧原A	野神字牧原・高尾・中牧	台地	繩(後)	磨製石斧・打製石斧	
42	塚堀	原田字塚堀・下原	台地	繩・歷	土師器	
43	釣段	山重字釣段・中迫・水道	台地	弥(前)	土器・石器	
50	古池	野神字古池・高尾	台地	弥(中)	石斧(磨製・打製)	
51	清水	原田字清水	台地	弥(中)	打製石斧・磨製石斧	旧遺跡名 元宮の下・永田
55	田瀬B	野神字田瀬・大久保	台地	弥	打製石器	
70	山神ノ上古墳	野神字後平	台地	古	円墳	
71	岩屋古墳群	野神字河内・井手元	台地	古	円墳 3基	
72	中方限古墳群	野神字穴倉	台地	古	円墳	
73	渡迫古墳群	野神字岩道	台地	古	円墳	
74	高井田古墳群	原田字下原	台地	古	円墳 1基・方墳 1基	
115	長塚古墳	野神字岩道・立下	台地	古	円墳	
117	穴倉	野神字穴倉	台地	繩(早) 弥・古	石坂式・下剥峯式・成川式	平成6年度農政分布調査 平成12年度確認調査 平成9・15年度全面調査 志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
118	北別府	野神字芝用・小迫	台地	繩		平成7年度農政分布調査
127	下堀	野神字下堀・立山	台地	繩(早) 弥・古	前平式・吉田式・倉園B式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・手向山式・押型文・塞ノ神式・右京西式・成川式・集石・連穴土坑	平成8年度農政分布調査 平成11・19年度確認調査 平成14・19年度全面調査 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
128	浜場	野神字浜場	台地	繩(早) 古	前平式・辻タイプ・加栗山式・石坂式・手向山式・寒ノ神式・苦浜式・石鐵・成川式・竪穴状遺構・連穴土坑	平成8年度農政分布調査 平成11・19年度確認調査 平成14・19年度全面調査 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
130	水道	野神字水道・水道	台地	古		平成11年度農政分布調査
131	釣ヶ段	山重字釣ヶ迫	台地	古		平成10年度農政分布調査
132	森土	野神字森土	台地	繩・古		平成11年度農政分布調査
133	鍋迫	野神字鍋迫・鍋前	台地	古		平成10年度農政分布調査
134	井ノ木	山重字上ノ段・竹迫	台地	古		平成11年度農政分布調査
135	大堀	野神字大堀・水喰	台地	古・古代		平成10年度農政分布調査
136	上原	原田字上原	台地	古		平成10年度農政分布調査
137	立山	原田字立山	台地	古		平成10年度農政分布調査
138	東中原	原田字東中原・大堀	台地	古		平成10年度農政分布調査
139	廣迫	野神字廣迫・中岡	台地	古		平成10年度農政分布調査
140	渡迫	野神字渡迫・岩道・薙田	台地	古代	土師器	平成11年度農政分布調査
141	牧原B	野神字牧原	台地	古		平成10年度農政分布調査
142	水喰	野神字水喰 蓬原字山ノ後	台地	古代		平成10年度農政分布調査
145	丸岡A	野神字丸岡・中ノ丸	台地	古		平成10年度農政分布調査
146	風穴	野神字風穴・五色	台地	古		平成10年度農政分布調査
147	上五敷	原田字上五敷・五色	台地	古		平成10年度農政分布調査
148	五色	野神字五色・風穴	台地	古		平成10年度農政分布調査
149	西ノ堀	原田字西ノ堀・下五敷	台地	古		平成10年度農政分布調査
151	丸岡B	野神字丸岡 蓬原字楠原・山ノ後	台地	古		平成10年度農政分布調査
152	楠原B	蓬原字楠原・山ノ後・屋部当	台地	古		平成10年度農政分布調査
201	大久保	野神字大久保・釣ヶ段	台地	弥	打製石斧	
202	下原	原田字下原	台地	古		平成10年度農政分布調査
203	大堀	原田字大堀・出口	台地	繩・古		平成8年度農政分布調査
204	浜場A	野神字浜場	台地	古代		平成15年度農政分布調査

第III章 全面調査の概要

第1節 全面調査の方法

調査対象区を任意のA～Cの3つのブロックに分割し、I・II層を重機により除去した後、ブロック毎に人力による掘り下げ作業を実施した。本事業地区は、基盤整備等がされており畠部分の上層は搅乱されていたが、遺物包含層の残存状況は良好な状態であった。

調査対象区は延長距離約100m、幅約4mの未舗装農道であり、調査区内の任意の起点から方位に応じた10m×10mのグリッドを設定し、東から西へ1～4区、北から南にA～K区の記号・番号を付し、「A-1区」「B-1区」…と呼称した。(第3図)

調査は、調査対象区北側のAブロックから調査を開始した。

第2節 層位

標準土層は、下記のとおりである。

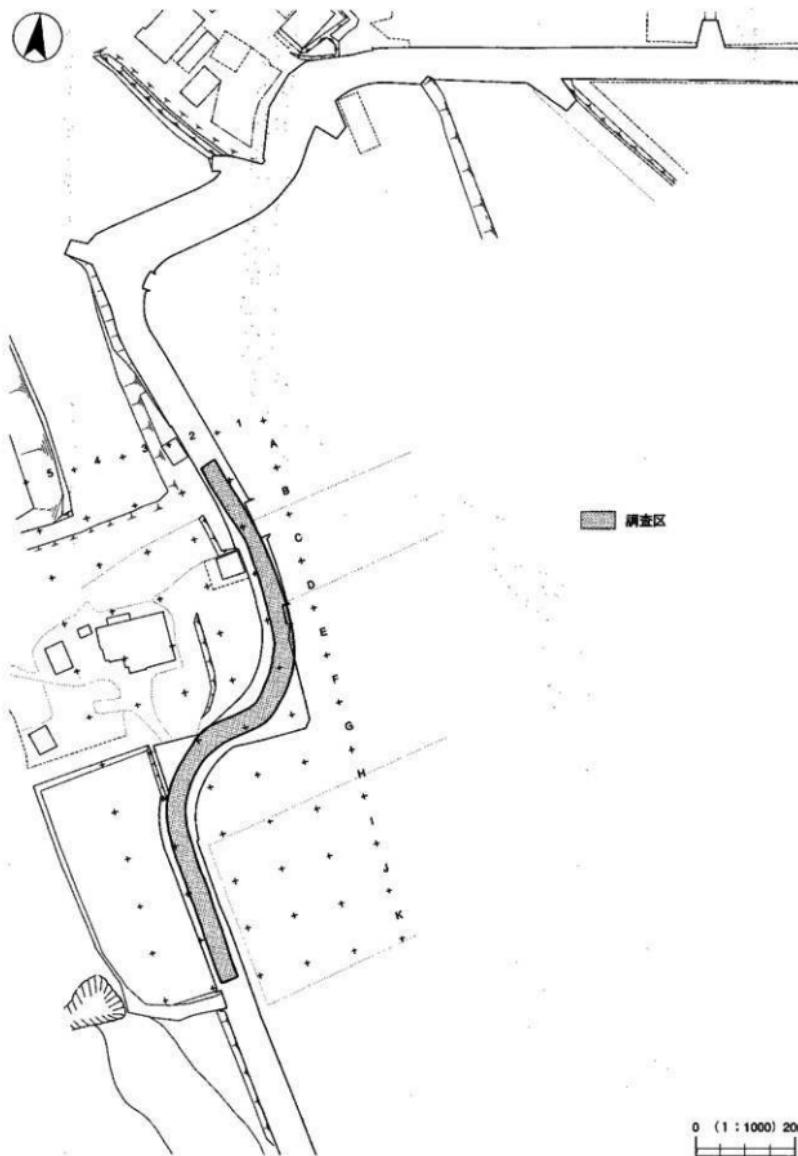
I層	灰褐色土	表土。旧道の硬化面あり。
II層	黒色腐植土層	やや粘質のある腐植土層で、平安・古墳・弥生時代の時期に相当する遺物包含層である。
III層	黄褐色土層	3,300年前の開聞岳噴出物と思われるオレンジ色のバミスを多く含む遺物包含層である。
IV層	黒褐色土層	やや硬質の土層である。
V層	黄橙色火山灰層	5,500年前の池田カルデラ降下軽石と思われるテフラがブロック状に点在している。
VI層	黒色土層	6,300年前に鬼界カルデラから噴出されたとされるアカホヤ火山灰で、全体にブロック状に存在している。

第3節 全面調査の概要

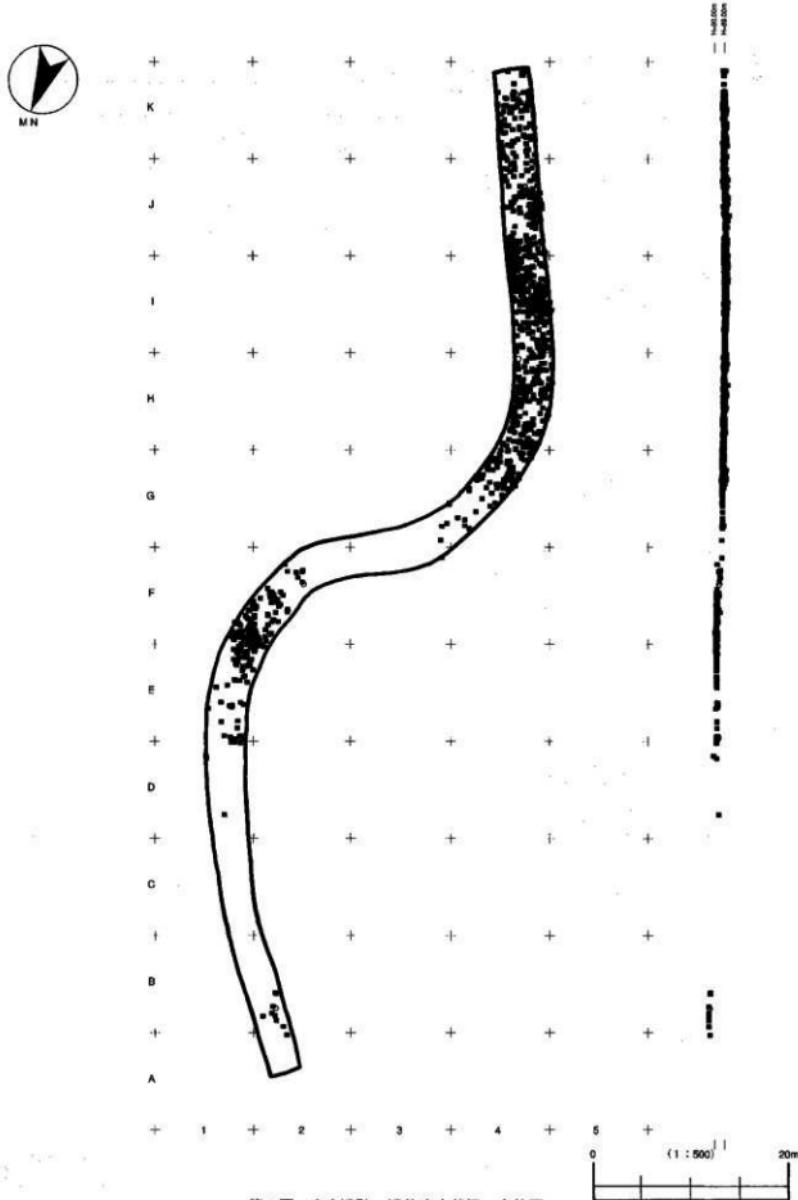
調査は、第I章で前述したが町耕地課が調査前に工事着手したため、工事を差し止めて行われた緊急の試掘調査により、包含層が確認された範囲で行った。短期間の全面調査を余儀なくされ調査の精度が図れなかったのは否めなかった。

そのような状態の中で、遺構はIII層上面よりE-1・2区より掘立柱建物1基、E-1区より掘立柱建物の柱穴配列内に土坑1基、E-1区、H～K-4区の範囲内から不規則な配置で検出された柱穴17基が検出された。

遺物は主にII層で出土した。遺物の分布は、A・B-2区、D・E・F-1区、E・F-2区、F・G-3区、G・H・I・J-4区、H・I-5区に広がり、調査対象区の南側に主に分布の傾向が見られた。(第4図)



第3図 穴倉遺跡 グリッド設定図



第4図 穴盒遺跡 遺物出土状況 全体図

第4節 発掘調査の成果

1 弥生時代・古墳時代の調査

遺物は弥生時代・古墳時代の遺物包含層であるⅡ層から、主として弥生土器を中心出土した。遺物の出土分布はA・B-2区、D～F-1区、E・F-2区、F・G-3区、G～J-4区、H・I-5区に広がり、調査対象区の南側に主に分布の傾向が見られた。(第8図)

遺構検出はⅢ・VI層上面で行った。検出の結果、Ⅲ層上面よりE-1・2区より掘立柱建物1基、E-1区より掘立柱建物の柱穴配列内に土坑1基と柱穴状遺構1基、H～K-4区に柱穴17基が検出された。

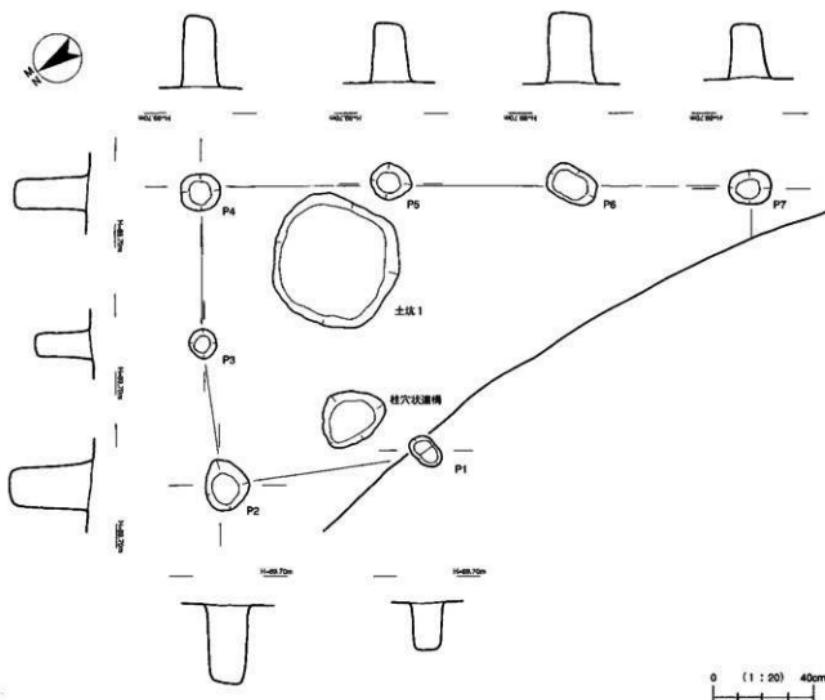
なお、VI層上面から遺構は検出されなかった。

(1) 遺構

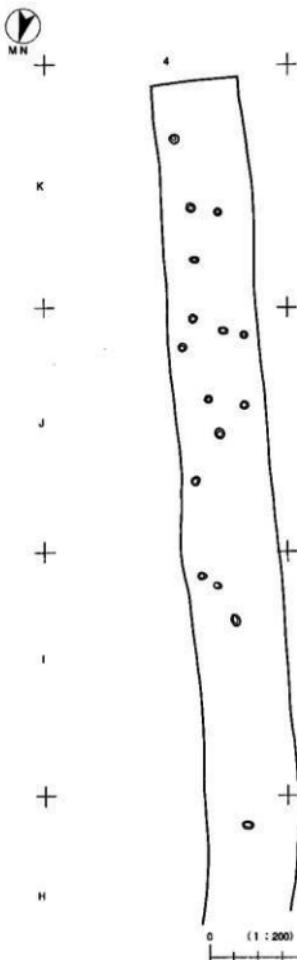
ア 挖立柱建物

① 挖立柱建物1 (第5図)

掘立柱建物1はⅢ層上面よりE-1・2区で検出された。長軸方向はN25° Eの北北



第5図 穴室遺跡 挖立柱建物1 平面・断面図



第6図 穴倉遺跡 Ⅲ層上面検出 遺構配置図
(H~K-4・5区)

く、遺構配置についても法則性が見られなかった。柱穴の分布は調査区の南側に向かって遺構密度が濃くなる傾向があり、また調査区の東西にも広がり、掘立柱建物等の遺構の配列が確認される可能性が十分考えられる。

東方向に延びる。遺構の南西側が事業対象区域外に延びており、遺構全体の形状は断定が出来ないが、残存する柱穴の配置から遺構の平面形は桁行2間×梁行3間の若干歪みのある長方形を呈すると思われる。遺構の検出された柱穴と柱穴の間隔は比較的狭く、また柱穴の形状に若干の差異はあるが、柱穴の径・深さはほぼ均一である。

なお、検出された柱穴埋土から弥生土器の高坏の口縁部(87)の一部が出土した。このことから掘立柱建物1は弥生時代以降に存在したと思われ、弥生時代の遺構として分類した。

また、掘立柱建物1の柱穴配列内にそれぞれ1基の土坑(以下「土坑1」と呼称)と柱穴状遺構が検出された。柱穴状遺構は平面の形状が若干歪な楕円形であり、直径約30cm、深さは40cmを測り、土坑1の計測値は第4表の通りである。土坑の平面形は隅丸方形に近い楕円形であり、検出面から床面までの最深部で32cmを測る。土坑の特徴として、検出面からほぼ垂直に近い掘り込みであり、底面は平坦に近い形状を持つ。土坑内より遺物は確認できなかった。

これらの掘立柱建物1・土坑1・柱穴状遺構は、掘立柱建物1周辺の同検出面から他の遺構が確認することができず、土坑1と掘立柱建物1の長軸方向の差異はあるものの、両遺構がごく近い位置関係で検出されたことから、ほぼ同時期に3つの遺構は存在したものと考えられる。

イ 柱穴

柱穴はH~K-4区に柱穴17基が検出された。(第6図)それぞれ検出された柱穴は掘立柱建物1の柱穴と比較して若干小さ

第3表 浜場遺跡 挖立柱建物1 計測表

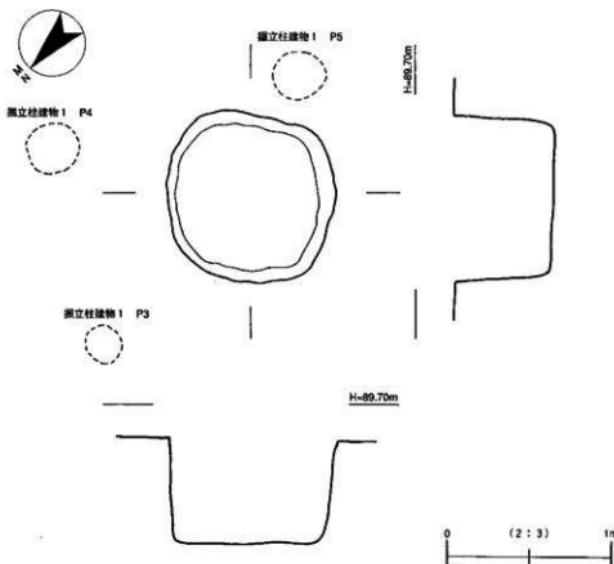
(単位:cm)

探査番号	第5図	検出区	E-1・2区	検出層	Ⅲ層上面	方位	N25°E	床面積 (m ²)	—	
梁行 1間	梁間柱間	梁行間	梁行 1間	梁行柱間	梁行間	柱穴 番号	長径	短径	深さ	柱穴 平面形
P2-P3	58.0		P1-P2	84.0		P1	14.0	9.0	19.0	橢円形
P3-P4	63.0	121.0	P4-P5	78.0	307.0	P2	21.0	18.0	32.0	橢円形
			P5-P6	73.0		P3	12.0	11.0	22.0	円形
			P6-P7	72.0		P4	16.0	15.0	29.0	円形
						P5	17.0	15.0	24.0	橢円形
						P6	20.0	19.0	28.0	橢円形
						P7	16.0	14.0	22.0	橢円形
平均	61.0	—	平均	77.0	—	平均	17.0	14.0	25.0	—

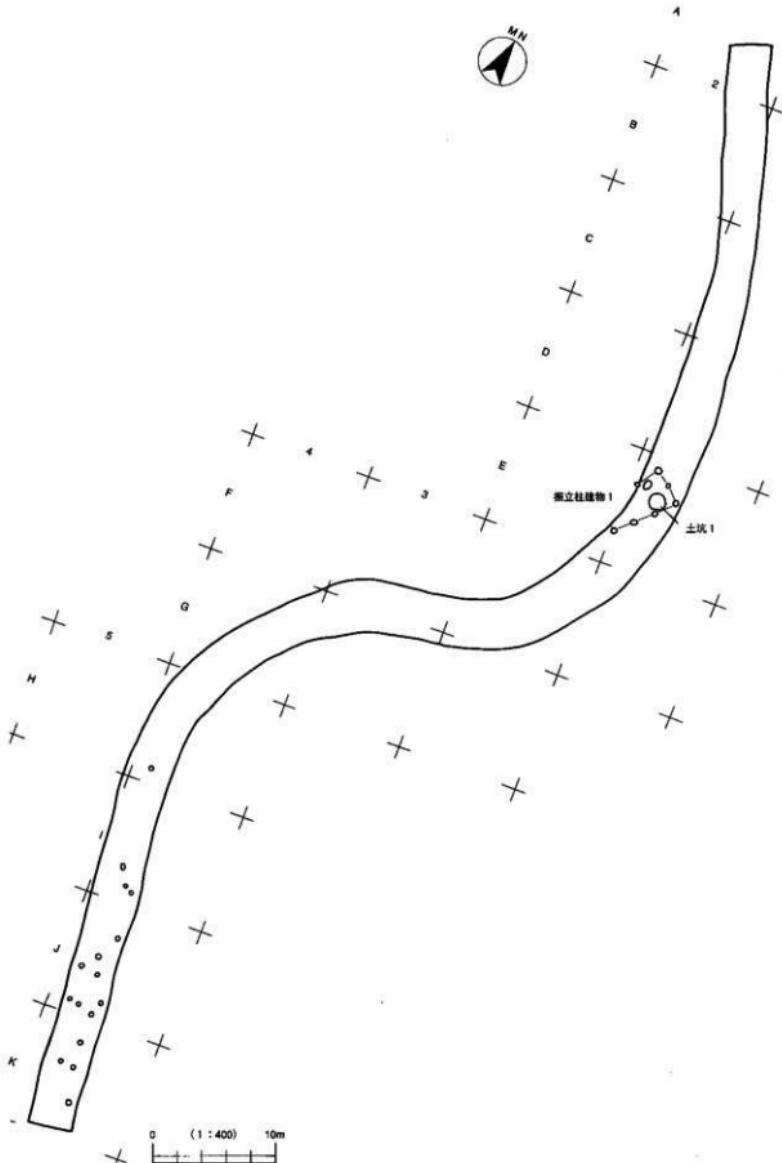
第4表 穴倉遺跡 挖立柱建物1内検出 土坑1 計測表

(単位:cm)

土坑番号	探査番号	検出区	検出層	長径	短径	深さ	平面形	備考
土坑1	第7図	E-1区	Ⅲ層上面	57.5	53.5	32.0	橢円形	



第7図 穴倉遺跡 土坑1 平面・断面図



第8図 穴倉遺跡 Ⅲ層上面検出 造構配置図

2 出土遺物

土器

土器は主に弥生土器・成川式土器がⅡ層より出土した。総点数はⅡ層より 1215 点を数え、その他Ⅲ層より 10 点 (A・B-2 区、D-1 区)、Ⅳ層より 2 点 (D-1 区) 出土し、Ⅲ・Ⅳ層出土遺物はⅡ層の落ち込みが考えられる。Ⅱ層出土土器の分布は D-1 区、E-1・2 区、F-1・2 区、F・G-3 区、G-4 区、H・I-4・5 区、J・K-4 区で確認され、特に I-4 区に土器の分布が密である。(第 16・17・18 図)

(1) 弥生土器

本遺跡から多数の弥生土器が出土している。それらの遺物は遺物包含層であるⅡ層から出土し、甕・壺・鉢・高坏・大甕・小型土器に分類され、特に甕・壺類を中心とした土器が大部分を占めている。これらの器種毎にさらに細かい分類基準を設けた。

1 甕

甕は口縁部の形態により 1 ~ 7 類に、底部の形態により 1 ~ 3 類に分類した。分類概念については下記のとおりである。

甕 口縁部

①甕 1 類 (第 9 図 6 ~ 8)

甕 1 類は「肥厚した逆 L 字状口縁。口唇部は丸みをもち、口縁部内側が強く張り出しの尖りが大きく、上面に凹みをもつもの。」と分類概念を定義した。6 ~ 8 は口縁部が残存し、口縁部上面に浅い凹みが見られ、口唇端部は平坦に近い。6 は張り出しの尖りは滑らかに調整される。7・8 は口縁部内側の張り出し面の調整が粗い。7・8 は同一個体と思われる。

②甕 2 類 (第 9 図 9)

甕 2 類は「器壁の薄い「く」の字状口縁。口縁部内部の張り出しある尖り、上位面に直線的に延びる平面をもつもの。口縁部断面は口唇部へ向かって先細りしており、長めの三角形を呈する。」と分類概念を定義した。9 は口縁部が残存する。口縁部内部の張り出しある尖り、面の調整は粗い。口唇部が浅く凹む。

③甕 3 類 (第 9 図 10~14)

甕 3 類は「口縁部内側の張り出しある尖りが小さくなるが、意識して張り出しあり「く」の字状の口縁を呈するものの。先細り気味の口縁部はやや長めで断面は三角形に近い。胴部上位面は直線的に延びる。」と分類概念を定義した。10~14 は口縁部が残存する。10 は口縁部上面端部に浅い凹みを、口唇部に凹みをもつ。11 は口唇部に凹みをもつ。12 は器壁が薄く比較的小型の甕である。口唇部に浅い凹みをもつ。13・14 は口縁部内部の張り出しある尖りがなく、平坦にナデ調整されている。口唇部の凹みがやや深い。

④甕 4 類 (第 9 図 15・16)

甕 4 類は「形態的には甕 2 類と同じだが、口縁部内部の張り出しある尖りが小さく、上面に平坦面が直線的に伸びるもの。口縁部断面は丸みをもった方形に近い。」と分類概念を定

義した。15・16は口縁部から胴部が残存する。15は口縁部内面の張り出しに大小あるが、比較的小さくおさまる。口唇部に浅い凹みをもつ。16は口縁部がやや反り気味であり、胴部に3条の三角突帯が廻る。口唇部に浅い凹みをもつ。

⑤壺5類（第9図 17）

壺5類は「立ち上がりの弱い口縁部が外反し、口縁部内側にわずかな張り出しか強い稜をもつ「く」の字状口縁。胴部は張り出しをもつもの。」と分類概念を定義した。17は口縁部が残存し、比較的小型の壺と思われる。

⑥壺6類（第9・10図 18～31）

壺6類は「口縁部が強く外反する「く」の字状口縁を呈し、内側に稜を持つが張り出しあは見られないもの。口縁部上面はわずかに反っている。胴部はあまり張りをもたず口縁に最大径を持つものが多い。」と分類概念を定義した。18・19は口縁部から胴部が残存する。18は口唇部が平坦で、胴部に3条の三角突帯が廻る。19は口唇部にわずかに凹みがあり、胴部に2条の三角突帯が廻る。胴部は底部に向かって緩やかに窄まる。20・21は口縁部が残存する。20は口唇部にわずかに凹みがあり、胴部に2条の三角突帯が残存する。21は稜があまり明確ではないが、口縁部の傾きが「く」の字状口縁を呈することから壺6類とした。口唇部は平坦である。22から24は口縁部から胴部が残存し、胴部は緩やかな張りをもつ。22は口唇部に明瞭な凹みをもち、胴部の器壁は比較的薄い。23は器壁も薄く、比較的小型の壺と思われる。口唇部に凹みをもつ。24は口唇部が欠損し、胴部に3条の三角突帯が廻る。25から28は口縁部が残存する。口唇部にわずかに凹みをもつ。29から31は胴部であり3条の三角突帯が残存する。29は突帯と突帯の間が他の遺物と比べて広いことから大壺の可能性もある。三角突帯の裾部が広がる。31は三角突帯の盛り上りが比較的小さい。

⑦壺7類（第10・11図 32～34）

壺7類は「口縁部の傾きが弱くわずかに外反するが直立気味に広がるもの。内側に張り出しあはもたず、口唇部は丸みをもち、尖るものと面を持つものがある。胴部上位に張りをもち脚台に向かって窄まる。」と分類概念を定義した。32から34は口縁部から胴部が残存する。32は口唇部が平坦で、胴部に2条の三角突帯が廻る。33・34は口唇部が平坦である。34は器壁が薄く、比較的小型の壺と思われる。

壺 底部

①壺(底)1類（第11図 35）

壺(底)1類は「大きな平底で安定しており、端部がやや張り出しをもつもの。」と分類概念を定義した。35は底部が残存する。端部にやや張り出しをもち、裾の端面近くに粗いナデ調整で歪な窪みをもつ。

②壺(底)2類（第11図 36・37）

壺(底)2類は「わずかな上底の脚台で脚の開きは小さく設置面が広いもの。胴部は直

線的に延びる。」と分類概念を定義した。36・37は胴部から底部が残存する。36は裾の端面に丸みを帯びている。37は裾の端面は凹んで、凹面状を呈する。

③甕(底)3類 (第11図 38)

甕(底)3類は「裾部が穏やかに開く脚台であり、脚台内面天井が凹むもの。」と分類概念を定義した。38は底部が残存し、裾の端面が丸みを帯びる。

2 壺

壺は口縁部の形態により1~7類に、底部の形態により1~4類に分類した。分類概念については下記のとおりである。

壺 口縁部

①壺1類 (第11図 39~41)

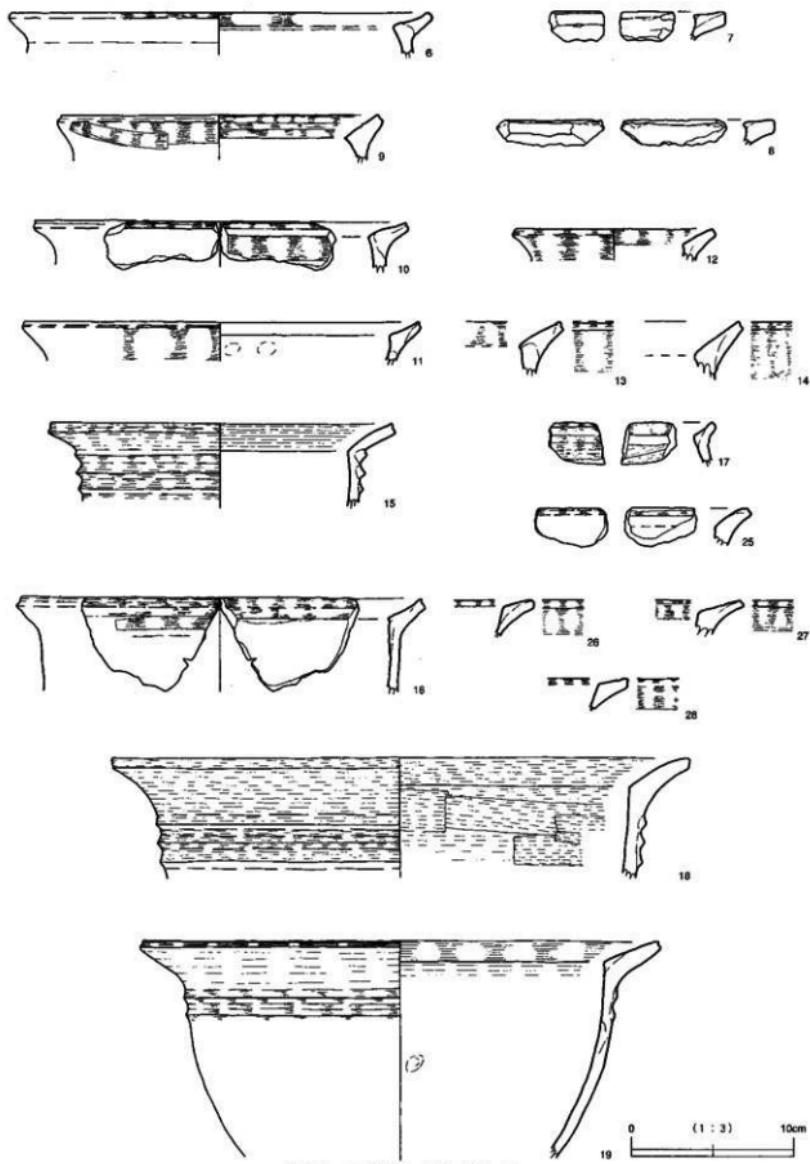
壺1類は「ラッパ状に外反する口縁部端部外面に突帯を施す。二又状口縁を呈するもの。」と分類概念を定義した。39・40は口縁部から胴部が残存し、39は口唇部がわずかに凹み、口縁部端部外面に三角突帯を廻らす。40は口唇部が凹み、口縁部端部外面に三角突帯を廻り、突帯端面は凹む。41は小型の壺の可能性もあったが口縁部から突帯の位置が近いため、この類に分類した。口縁部内面に稜をもつ。

②壺2類 (第11・12図 42~50)

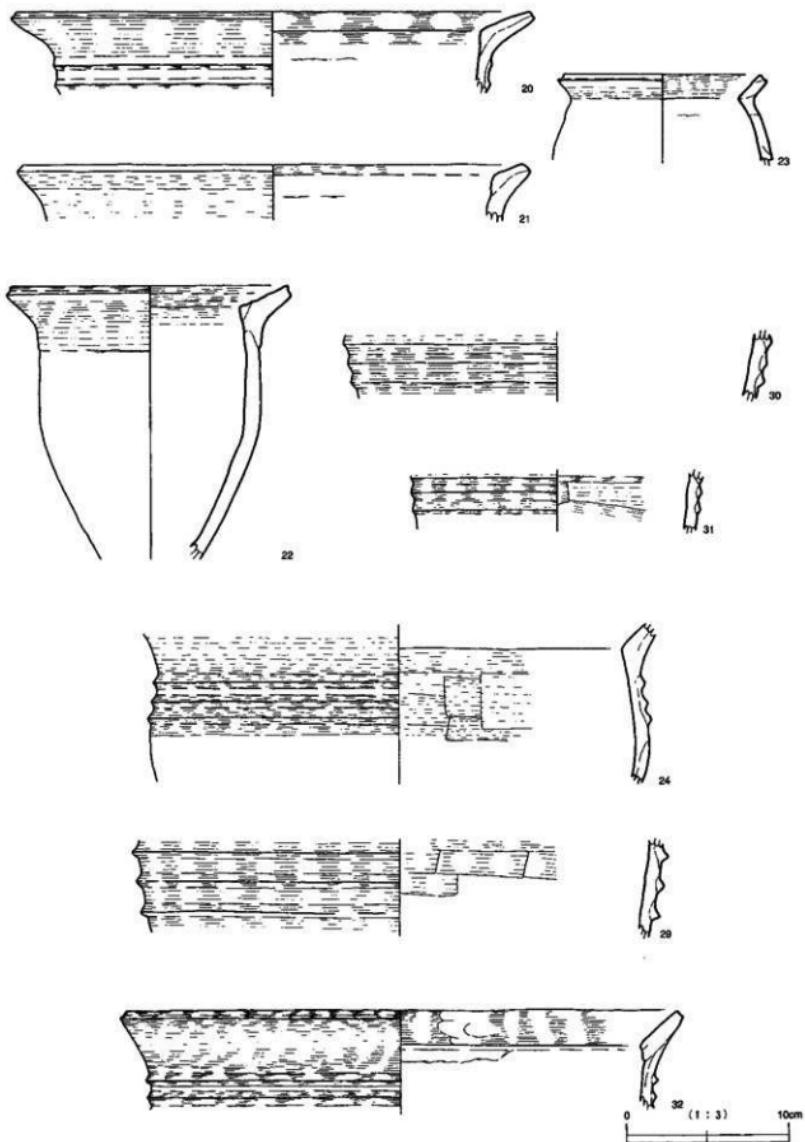
壺2類は「口縁部が大きく外反し、内側に明瞭な稜をもち、口唇部に広めの平坦面があり口唇部端部に丸みを帯びるもの。口唇部の平坦面に沈線をもつものもある。」と分類概念を定義した。42・43は口縁部から頸部が残存する。42は口唇部に工具による3条を基本とした小波状の沈線文が施文される。外面にナデ磨き調整が認められ、50と同一個体と思われる。43は口唇部の平坦面に浅い凹みがある。44と同一個体と思われる。44から49は口縁部が残存する。44は口唇部の平坦面に浅い凹みがある。43と同一個体と思われる。45は口唇部に明瞭な凹みがあり、口縁部端部外面に三角突帯を貼付けている。46は口唇部に広めの平坦面があり、口縁部端部外面の張り出しが顕著で、断面から観認できなかったが、口縁部端部外面に三角突帯を貼付したものと思われる。47は46と同様の形状であるが、さらに強い張り出しがあり、口縁部端部外面に三角突帯の貼付が観認できる。48・49も46と同様に口唇部に広めの平坦面があり、口縁部端部外面の張り出しが顕著である。48は口唇部に工具による3条を基本とした小波状の沈線文が施文される。49は工具による3条を基本とした幾何学状の沈線文が施文される。50は頸部から胴部が残存し、外面をヘラ磨き調整が認められ、大きい張り出しをもつ。42と同一個体と思われる。

③壺3類 (第11・12図 51~53)

壺3類は「締まった頸部からやや立ち上がり気味に開き、上位で強く外反する広口壺の口縁部をもつもの。口唇部に面をもち中央がやや浅く凹む。」と分類概念を定義した。



第9図 穴倉遺跡 弥生土器 1



第10図 穴盒遺跡 弥生土器 2

51 は口縁部が残存する。51 は頸部内側に稜をもち、口唇部の面は平坦に近い。52・53 は口縁部から胴部が残存する。52・53 は 51 と異なり頸部に稜が見当たらず、口唇部に浅い凹みをもつ。52 は胴部の張り出しがあり、口縁部を上回る径をもつが、53 は張り出しが弱く、底部に向かって窄まると思われ、短頸壺の可能性がある。

④壺 4 類（第 12 図 54～64）

壺 4 類は「胴部は膨らみをもち、口縁部の屈曲が弱く緩やかに外反するもの。」と分類概念を定義した。54 は口縁部から頸部が残存し、口唇部が平坦である。55・56 は口縁部が残存する。55 は壺 3 類に類する可能性があるが、口縁部の屈曲が緩やかに外反することから第 4 類に分類した。口唇部は平坦で、口縁部直下にも面取り的に平坦面をもつ。頸部に焼成前に穿かれたと思われる直径 5mm 程度の孔が 2 個所ある。56 は口唇部にわずかに凹みがあり、口縁部端部外面に横ナデ調整の際に施されたと思われる段がある。57 は頸部が残存し、頸部にごく近く胴部上位に 2 条の三角突帯が残存する。58 から 64 は胴部が残存する。58 は胴部上位に頸部内面の屈曲が見られ、57 と同様頸部にごく近く胴部上位に 3 条の三角突帯が廻る。器壁は比較的薄い。59 は胴部に 4 条の三角突帯が残存する。この遺物の胎土は他の遺物と異なって乳白色を呈しているため、搬入品の可能性がある。60・61 は胴部に 2 条の三角突帯が残存する。61 は比較的器壁が薄い。62 は胴部内面上位に緩やかな屈曲が見られる。63 は胴部に 3 条の三角突帯が残存し、胴部上位外面に三角突帯の据と思われる部位が見られる。64 は 2 条の三角突帯が残存する。

⑤壺 5 類（第 12 図 65）

壺 5 類は「張りのある胴部をもつもの。」と分類概念を定義した。65 は頸部から胴部が残存し、頸部に 1 条の三角突帯が残存する。

⑥壺 6 類（第 13 図 66・67）

壺 6 類は「胴部が大きく張り出し、胴部中位が「く」の字状に屈曲し稜をもち、胴部の形状が算盤玉状のもの。」と分類概念を定義した。66・67 は胴部が残存し、稜の上位はハケ目調整が施される。66・67 は同一個体と思われる。

⑦壺 7 類（第 13 図 68）

壺 7 類は「全体器形は不明であるが、突帯や文様等に特徴のあるもの。」と分類概念を定義した。68 は胴部と思われ、1 条の三角突帯が残存し、その下位に低い円柱状の突起が貼り付けられている。

壺 底部

①壺（底）1 類（第 13 図 69・70）

壺（底）1 類は「円盤状の平底をもつもので、比較的底径が小さいもの。胴部は接地面からわずかに直立した後、大きく開き直線状に伸びる。」と分類概念を定義した。69・70 は胴部から底部が残存する。69 は器壁が厚く、胴部がわずかに内湾する。70 は比較的器壁が薄く、69 よりもさらに胴部が開いて伸びる。

②壺（底）2類（第13図 71・72）

壺（底）2類は「底面の張り出しが見られず広い平坦面を持つ平底で、直接胴部が開くもの。」と分類概念を定義した。71・72は胴部から底部が残存する。71は底面に打痕が見られ、何らかの理由で打ち抜いた可能性がある。72は接地面からの立ち上がりが丸みを帯びる。

③壺（底）3類（第13図 73～78）

壺（底）3類は「底面から緩やかに立ち上がるるもので、第2類よりも底径が小さいもの。」と分類概念を定義した。73から79は胴部から底部が残存する。73は器壁が底部・胴部とも薄く、胴部はかなり開いて伸びる。74は73と同様に胴部がかなり開いて伸びると思われるが、底部の器壁は厚い。75は胴部が緩やかに立ち上がり、直線状に伸びる。76は胴部が内湾しながら立ち上がる。底径は胴部の張りに対して小さめである。77は接地面の立ち上がりが丸みを帯び、胴部の立ち上がりは直線状に伸び、比較的小型の壺の可能性がある。78は底径が2cmと極めて小さい。また底部は器壁が厚く、胴部がかなり開いて伸びると思われ、甕の可能性も考えられる。

④壺（底）4類（第13図 79）

壺（底）4類「底面に明瞭な平坦面を持たない、丸底気味の底部であるもの。」と分類概念を定義した。79は底面が1cm程度で、その底面も明瞭な平坦面は見当たらず、底面に凹みが見られる。器壁が薄く、胴部も強い張り出しをもち、比較的器高の低い壺と思われる。

3 鉢

鉢は口縁部の形態により1～3類に分類した。分類概念については下記のとおりである。

鉢 口縁部

①鉢1類（第13・14図 80～82）

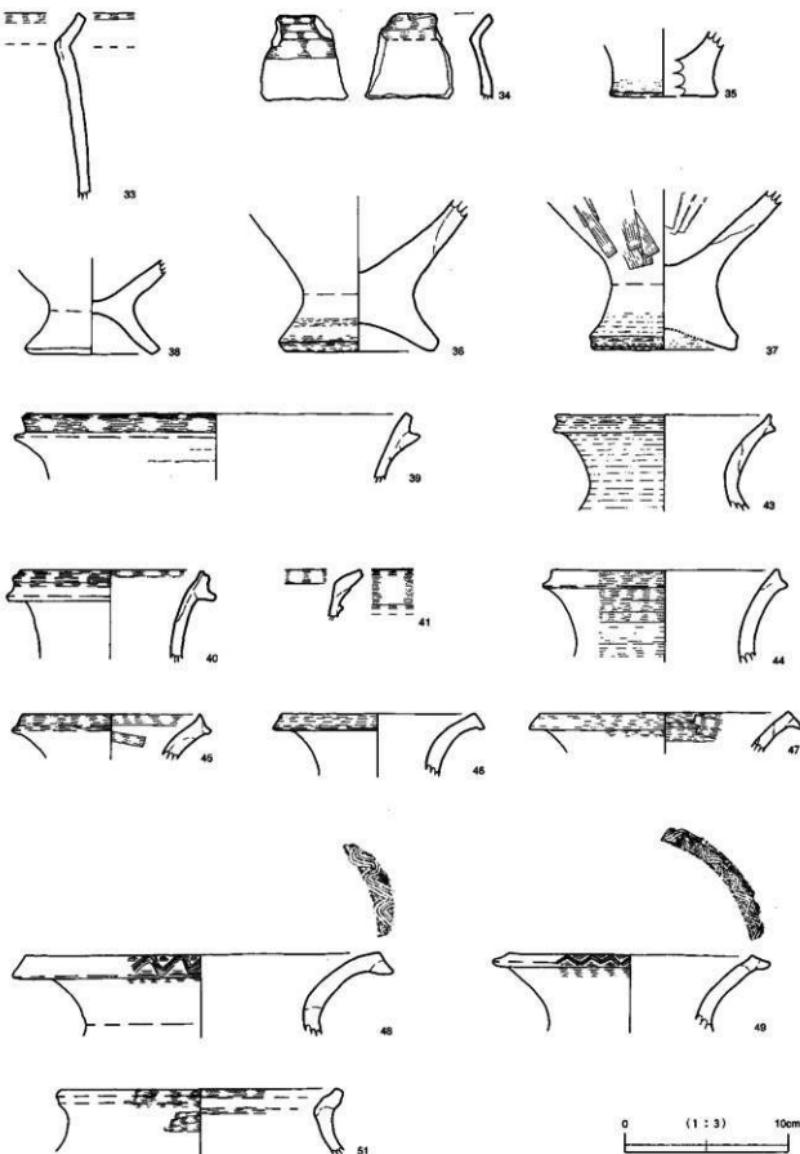
鉢1類は「口縁部が緩やかに外反する「く」の字状の口縁部で、内側に稜をもつもの。80から82は口縁部が残存する。」と分類概念を定義した。80は口唇部が平坦で、81・82は口唇部に浅い凹みをもつ。

②鉢2類（第13図 83）

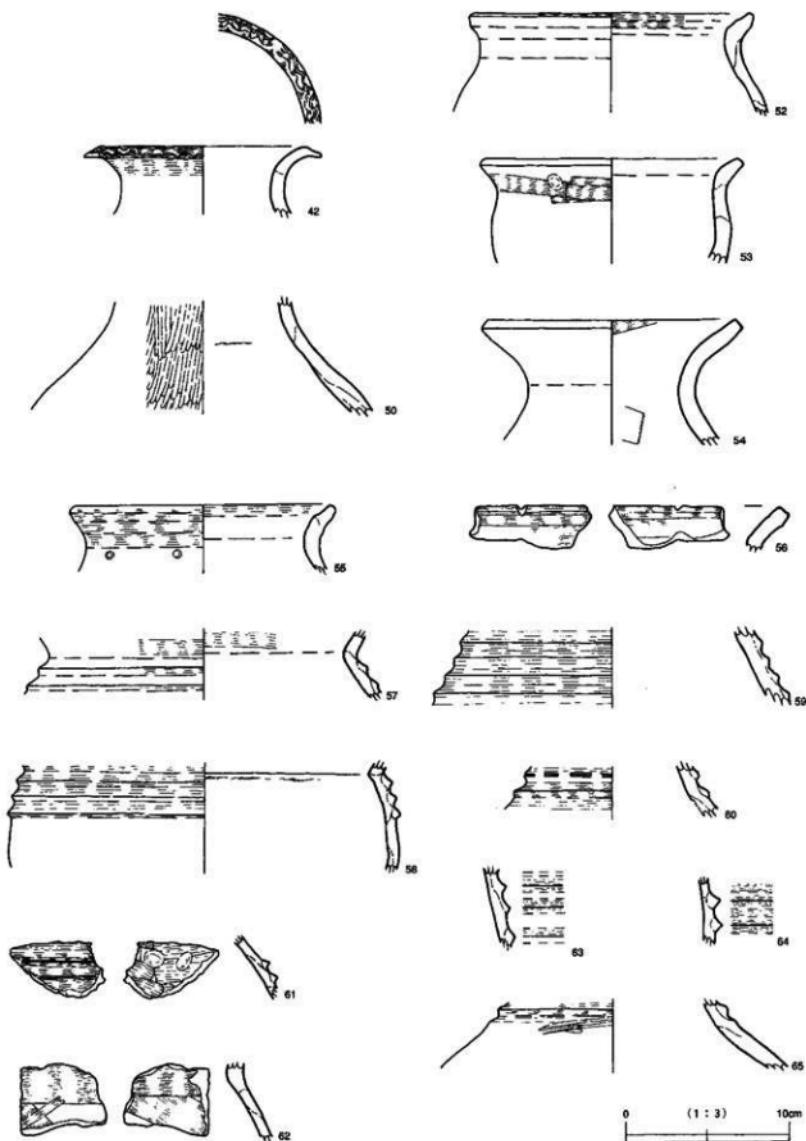
鉢2類は「口縁部が緩やかに外反する「く」の字状の口縁部で、内側に稜を持たないもの。」と分類概念を定義した。83は口縁部が残存し、やや膨らみをもつ胴部から緩やかに外反し、口唇部近くで強く反る。

③鉢3類（第14図 84）

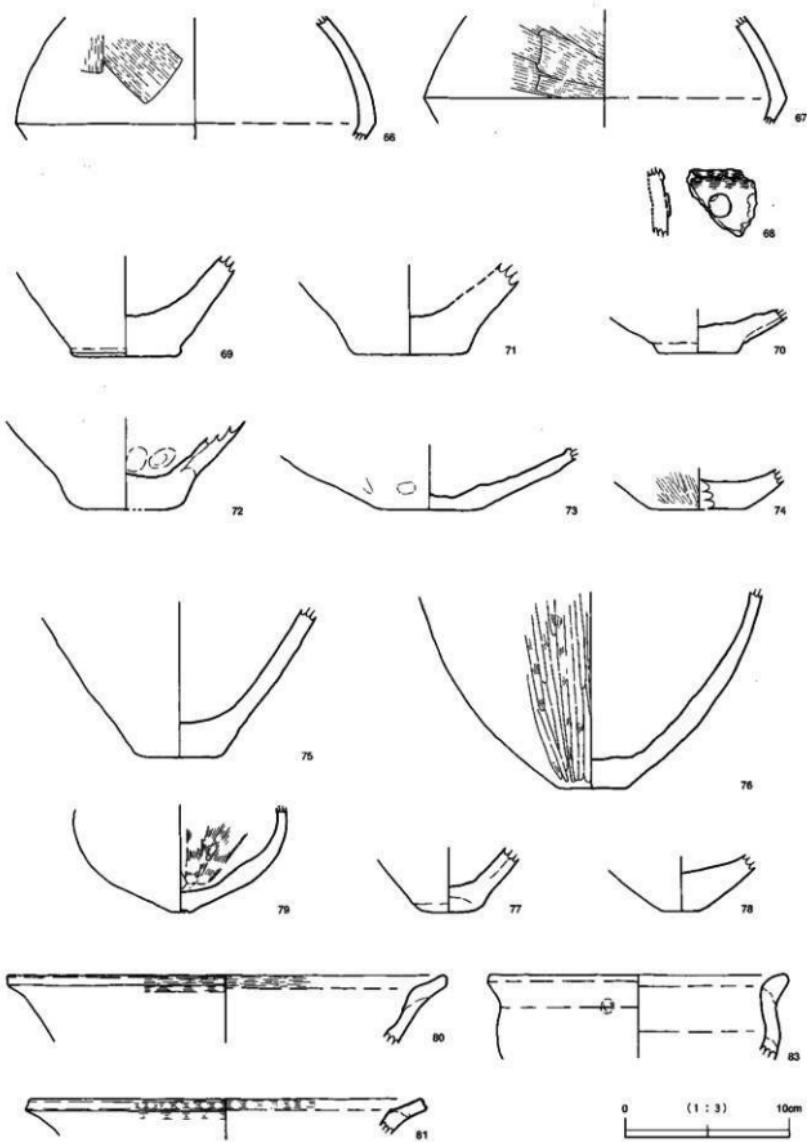
鉢3類は「口唇部がわずかに反り気味なもの、或いは直線的なもので、口縁部が直線的に伸びるもの。」と分類概念を定義した。84は口縁部が残存し、直線的に伸び、口唇部は平坦である。



第11図 穴倉遺跡 弥生土器 3



第12図 穴倉遺跡 甌生土器 4



第13図 穴盒遺跡 弥生土器 5

4 高坏

高坏は1類のみの分類となった。分類概念については下記のとおりである。

①高坏1類（第14図 85・86）

高坏1類は「逆L字状口縁を呈し、口縁部上位面に直線的に延びる平面をもつもの。口縁部内側に明瞭な稜をもつ。」と分類概念を定義した。85は口縁部から胴部が残存する。口縁部上面は平坦で、口縁部内側はわずかに肥厚する。口唇部は丸みをもつ。86は口縁部が残存し、口縁部上面は平坦で、その平坦面に、工具による小波状の沈線文が施される。口縁部内面にわずかな張り出しをもつ。

5 大甕

大甕は口縁部・胴部の形態により1～3類に分類した。分類概念については下記のとおりである。

①大甕1類（第14図 87・88）

大甕1類は「頸部がわずかに縮まり、「く」の字状に外反する口縁部で、内側に稜をもたないものの。胴部上位に大きな突帯を施す。」と分類概念を定義した。87・88は口縁部から胴部が残存する。87は「く」の字状に外反する口縁部が剥離し、その下位の三角突帯が残存し廻る。88は「く」の字状に外反する口縁部の下位に三角突帯が廻る。87・88は同一個体と思われる。

②大甕2類（第14図 89～92）

大甕2類は「直立気味の口縁部下位に、突帯を施すもの。」と分類概念を定義した。89は口縁部から胴部が残存する。口縁部はわずかに内湾し、口唇部は丸くおさまる。口縁部下位に上向きに張り出して三角突帯が廻る。胴部は底部に向かって緩やかに窄まる。突帯付近が器の最大径をとると思われる。90・91は口縁部が残存する。口縁部は直行し、口唇部は平坦である。口縁部下位に三角突帯がわずかに上向きに張り出し三角突帯が廻る。92は口縁部から胴部が残存し、口縁部は直行し、口唇部は明瞭な平坦面を作る。他の遺物と比べ口縁部下位に貼り付けられた三角突帯の位置が上がり気味で、突帯も比較的小さい。胴部は89と同様に底部に向かって緩やかに窄まる。

③大甕3類（第14図 93）

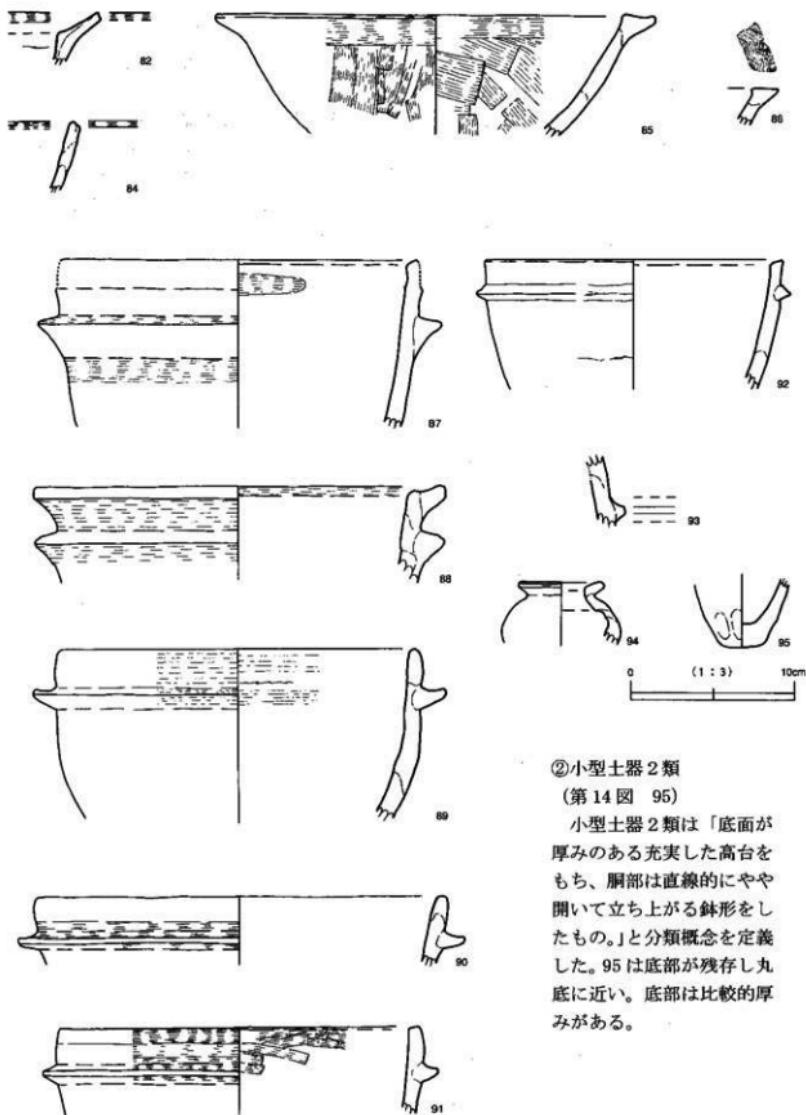
大甕3類は「貼りのある胴部中位に断面が「コ」の字状の突帯を施したもの。」と分類概念を定義した。93は胴部が残存し、突帯中央に凹みが見られる。

6 小型土器

小型土器は口縁部・底部の形状により1・2類に分類した。分類概念については下記のとおりである。

①小型土器1類（第14図 94）

小型土器1類は「張りのある胴部から大きく外反する小型の広口壺の口縁部であるもの。」と分類概念を定義した。94は口縁部が大きく外反し、口唇部は丸くおさまる。胴部内面は手捏ね調整が施され歪である。



②小型土器 2類

(第14図 95)

小型土器 2類は「底面が厚みのある充実した高台をもち、胴部は直線的にやや開いて立ち上がる鉢形をしたもの。」と分類概念を定義した。95は底部が残存し丸底に近い。底部は比較的厚みがある。

第14図 穴倉造跡 弥生土器 6

(2) 成川式土器 (第15図 96~106)

本遺跡からは古墳時代の遺物として成川式土器がII層より出土している。それらの遺物は甕・壺・鉢に分類される。

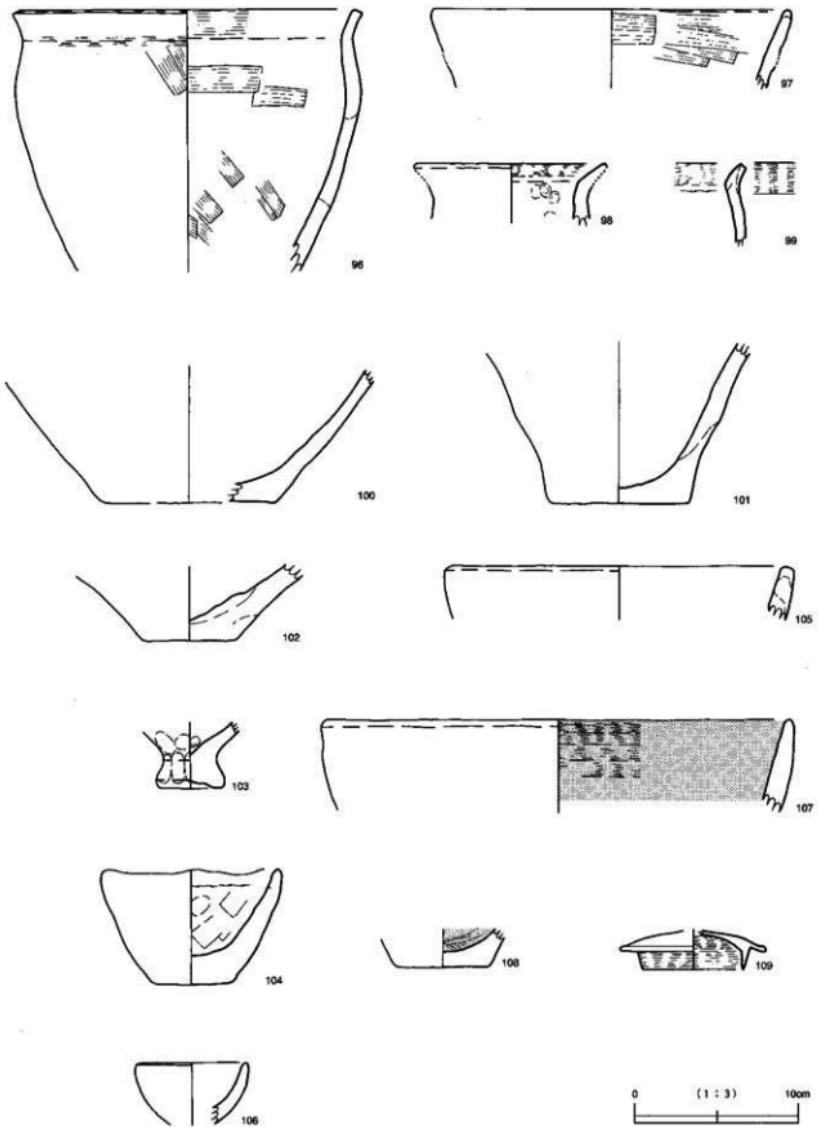
96から98は甕である。96は口縁部から胴部が残存する。「く」の字状の口縁部は直行し、口縁部内部の稜は弱い。胴部はやや膨らみをもつ。97・98は口縁部が残存する。97は口縁部が直行し、口縁部下位に突帯が廻っていたと思われる痕跡が残る。口唇部は丸みを帯びる。98は口縁部が外反し、口縁部は口唇部に向かって先細りしており、口唇部は丸くおさまる。口径が小さく比較的小型の甕と思われる。99から103は壺である。99は口縁部が残存し、口縁部は「く」の字状に外反する。比較的短頸の口縁部である。口唇部はわずかに回む。100から102は胴部から底部が残存し、底面の張り出しが見られず広い平坦面をもつ平底である。100は胴部が開いて直行する。胴部は比較的器壁が薄い。101は100よりも胴部が立ち上がり、器壁は直である。102は胴部が大きく開いて直行するように思われる。103は底部が残存する。わずかに上底の底面で、その成形・調整は直で粗い。底径が狭く比較的小型の壺、あるいはミニチュア土器の可能性がある。底面は104から106は鉢である。104は完形の鉢である。器壁の成形・調整が粗く直で、底径が狭く、部分によって明瞭な平坦面をもたず、丸底気味の部分がある。105・106は口縁部が残存する。105は口縁部がわずかに内湾すると思われ、口唇部は平坦面をもつ。106は口縁部が内湾し、口唇部は丸くおさまる。口径が小さく比較的小型の鉢と思われる。

(3) 内黒土器 (第15図 107・108)

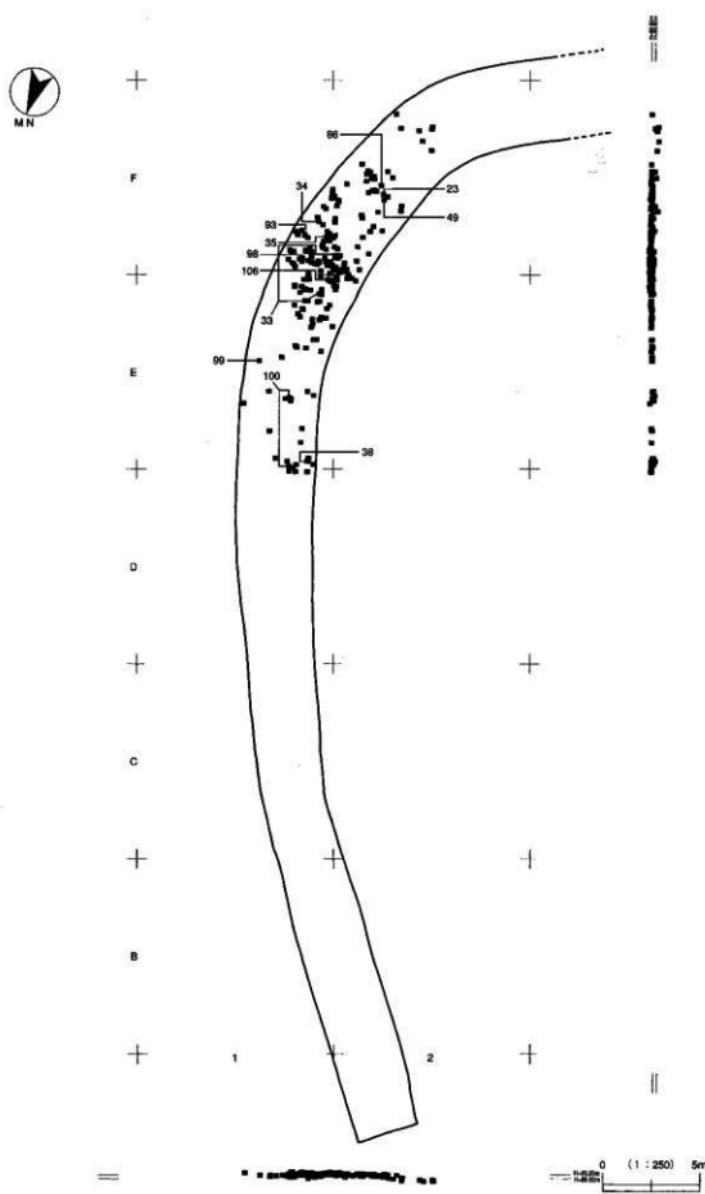
本遺跡からは古代の遺物として内黒土器がII層より2点(107・108)出土している。107は鉢の口縁部と思われ、やや開いて直行し、口唇部は丸くおさまる。108は壺の底部と思われ、体部の底部からの立ち上がりが角をもつ。

(4) 陶器 (第15図 109)

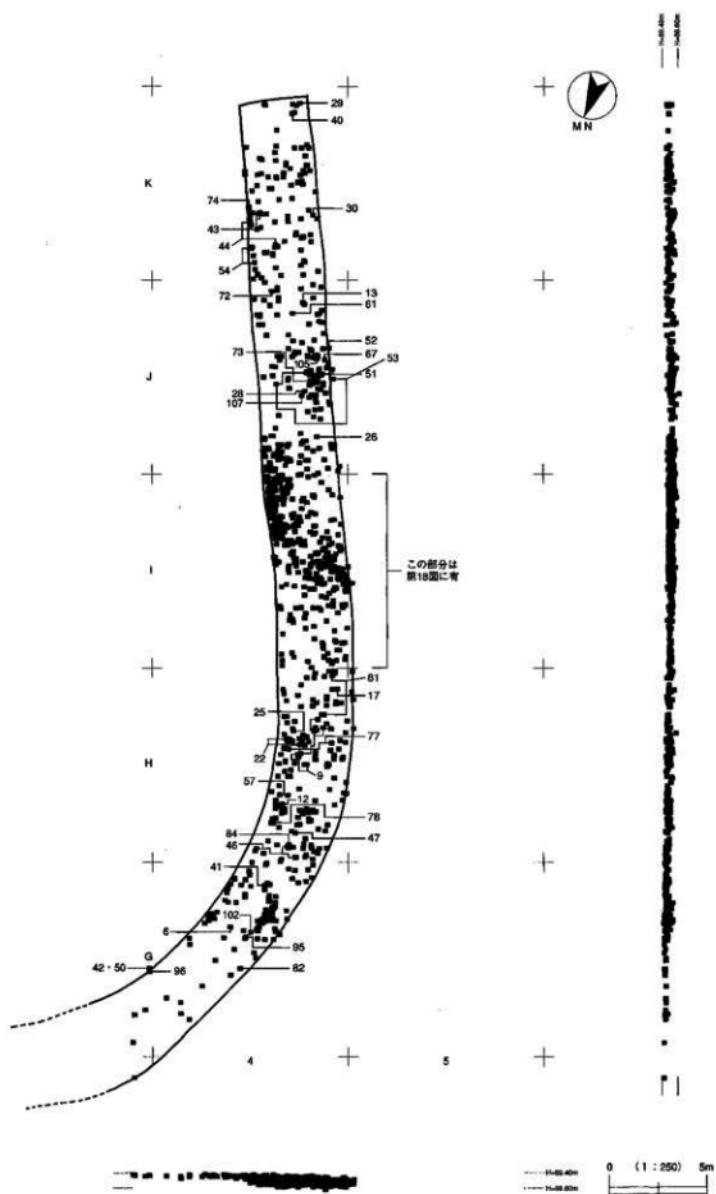
本遺跡から陶磁器類は包含層中からほとんど確認することは出来なかつたが、表採遺物として陶器片が確認することができた。II層の上層が表土層に削平されている可能性もあり、本遺跡出土遺物として比較的残存している陶器片(109)を実測・図化した。109は黒薩摩の急須の蓋と思われ褐釉色を呈し、頂部の摘みが欠ける。



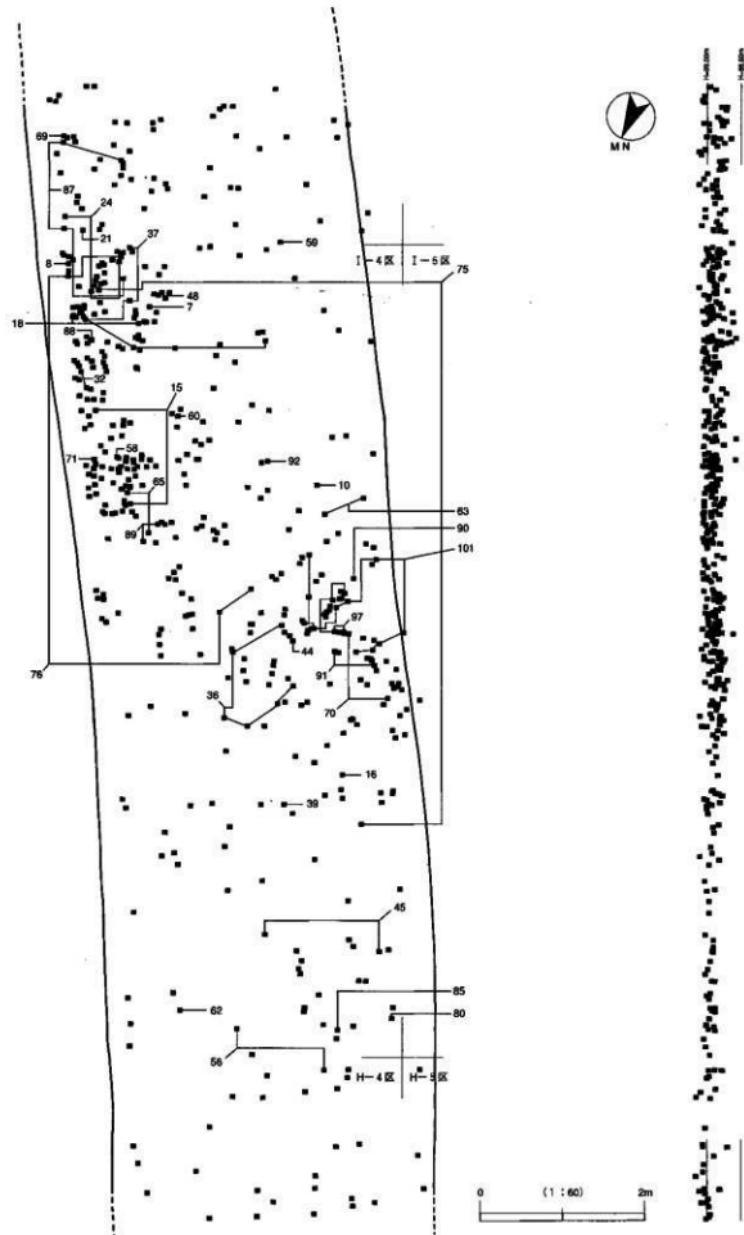
第15図 穴倉遺跡 成川式土器・内黒土器・陶器



第16図 穴食遺跡 II層出土 弥生土器・成川式土器 遺物出土状況図 (B～F-1・2区)



第17図 穴倉遺跡 II層出土 弥生土器・成川式土器 遺物出土状況図 (F~K-4・5区)

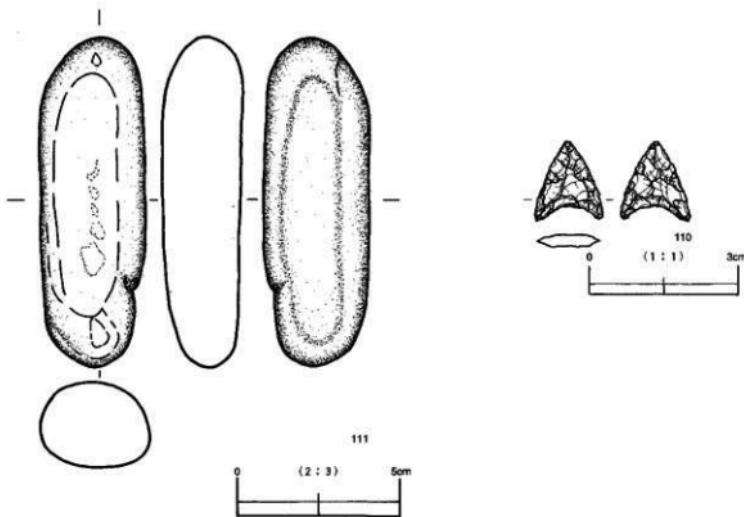


第18図 穴倉遺跡 II層出土 弥生土器・成川式土器 遺物出土状況図 (I-4区)

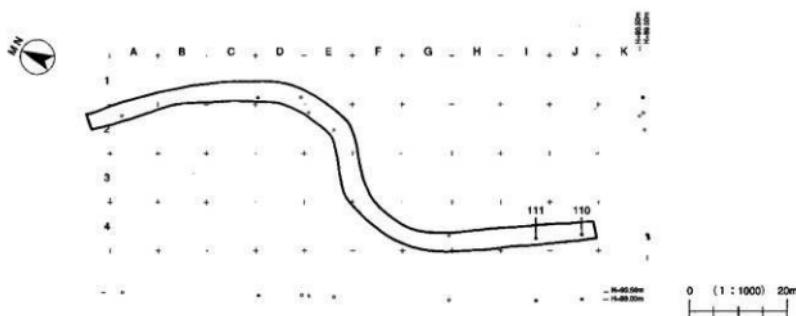
石器（第19図 110・111）

本遺跡からII層より石器として確認できる遺物は2点、軽石4点、石1点が出土し、その2点（110・111）を実測・図化した。

110は安山岩製の石鏃であり、抉入部が比較的浅い抉りをもつ薄手の石鏃である。111は棒状の磨石である。表面は研磨による磨耗が見られ、底面は平坦に近い。表面に赤変した部分が見られる。



第19図 穴倉遺跡 石器



第20図 穴倉遺跡 II層出土 石器出土状況図

第5表 穴倉遺跡 弁生土器 壺1～7類 土器観察表

標図 番号	柱記 番号	出土区 出土層 (遺物)	器種	部位	分類	胎 上					色 調	施文・調整	法蓋 (cm)	備考	
						±	±	±	±	±					
第9回 6	1196	6-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	にじいろ褐色	模ナメ・ナメ	28.4	- 2.6 壺1面 外側に風化
第9回 7	529	1-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	-	- 1.8 壺1面
第9回 8	493	1-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	ナメ	-	- 1.5 壺1面
第9回 9	1015-1054	6-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	29.4	- 2.8 壺2面
第9回 10	649	1-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	23.0	- 2.8 壺3面
第9回 11	92	6-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	-	- 2.4 壺3面 外側に風化
第9回 12	1058-1061	6-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	にじいろ褐色	模ナメ	32.0	- 2.0 壺3面 内側に風化
第9回 13	601	J-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/3	にじいろ褐色	模ナメ	-	- 3.2 壺3面 外側に風化
第9回 14	-	瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	ナメ	-	- 3.5 外側に風化
第9回 15	561-565	1-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/2	にじいろ褐色	模ナメ	30.8	- 5.1 壺1面 外側に風化
第9回 16	779-777	1-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	34.4	- 3.8 壺3面 外側に風化
第9回 17	947	6-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	-	- 2.5 壺1面 内側に風化
第9回 18	534-535	1-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	35.0	- 7.4 壺1面 外側に風化
第9回 19	182-189	1-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/4	にじいろ褐色	模ナメ・ナメ	31.2	- 13.8 壺3面 外側に風化
第9回 20	186-219	P-1-2区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/4	にじいろ褐色	模ナメ・ナメ	31.6	- 5.1 壺1面 外側に風化
第10回 21	496	J-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	30.8	- 5.8 壺1面
第10回 22	571-572-590 962-965 968-967 1017-1051	H-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	32.0	壺3面
											STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	-	
第10回 23	190	F-2区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	32.0	- 5.5 壺3面 内側に風化
第10回 24	485-513 824	J-1-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	-	- 9.1 壺1面
第10回 25	996	H-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/4	にじいろ褐色	模ナメ・ナメ	-	- 2.1 壺1面
第10回 26	622	J-1区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	-	- 2.9 壺1面 外側に風化
第10回 27	-	灰陶	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/4	にじいろ褐色	模ナメ・ナメ	-	- 2.1 壺1面
第10回 28	593	J-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/4	にじいろ褐色	模ナメ・ナメ	-	- 2.6 壺1面
第10回 29	229	K-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/4	にじいろ褐色	模ナメ・ナメ	-	- 5.9 壺1面 外側に風化
第10回 30	382	E-1区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/4	にじいろ褐色	模ナメ・ナメ	-	- 4.1 壺1面 内側に近い
第10回 31	143	F-2区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/4	にじいろ褐色	模ナメ・ナメ	-	- 3.3 壺1面 内側に近い
第10回 32	592-594	I-4区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/2	にじいろ褐色	模ナメ・ナメ	31.0	- 6.1 壺1面 内側に風化
第11回 33	58-66	S-1-2区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	-	- 11.3 壺1面
第11回 34	137	F-1区 瓦層	壺	口縁部	胎生土器	○	○	○	○	○	STW6/4	にじいろ褐色	模ナメ・ナメ	-	- 3.2 壺1面 外側に風化 内側に風化

第6表 穴倉遺跡 弁生土器 壺(底)1～3類 土器観察表

標図 番号	柱記 番号	出土区 出土層 (遺物)	器種	部位	分類	胎 土					色 調	高文・調整	法蓋 (cm)	備考	
						±	±	±	±	±					
第11回 35	142	F-1区 瓦層	壺	胎生土器	○	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	6.2	3.2 壺1面
第11回 36	697-749-750 757-758-759	I-4区 瓦層	壺	胎生土器	○	○	○	○	○	○	STW6/6	褐色	模ナメ・ナメ	9.0	9.4 壺2面
第11回 37	594-611-626 627-641-646	I-4区 瓦層	壺	胎生土器	○	○	○	○	○	○	STW6/4	にじいろ褐色	模ナメ・ナメ	-	8.5 壺2面
第11回 38	214	E-1区 瓦層	壺	胎生土器	○	○	○	○	○	○	STW6/4	にじいろ褐色	模ナメ・ナメ	-	7.6 壺1面 内側に風化 外側に風化

第7表 穴倉遺跡 弥生土器 壺1~7類 土器観察表

測定番号	番号	性別	出土位置	土層	器種	部位	分類	新土器						色調	施文・調節	法基 (cm)	参考			
								上	中	下	左	右	前	後						
第11回	39	798	J-4区 II層	重	口縁部 ～側面	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/3 2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6	にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色 褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	23.8	—	4.0 第一回 第二回火候
第11回	40	231	J-4区 II層	重	口縁部 ～側面	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6	にぶい褐色 にぶい褐色 褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	31.2	—	5.4 第一回 第二回火候
第11回	41	1140	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/6	褐色	ナゲナゲ・ナゲ	—	—	3.9 第一回 外壁に墨跡 内壁に墨跡
第12回	42	1254	G-2区 II層	重	口縁部 ～側面	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/6	褐色	ナゲナゲ・ナゲ	—	—	第2回 口部に小突状の 凹部に墨跡 内壁に墨跡 50×2回・側体
第11回	43	273・276 280・291	J-4区 II層	重	口縁部 ～側面	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	13.2	—	5.7 第二回 第三回
第11回	44	295・297 700・701	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	14.6	—	4.2 第二回 第三回
第11回	45	913・916	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/6	褐色	ナゲナゲ・ナゲ	—	—	第三回
第11回	46	1106・1109 1117	H-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/6 2.5196/7	褐色	ナゲナゲ・ナゲ	—	—	第三回
第11回	47	1002	H-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	15.0	—	2.3 第三回 外壁に墨跡
第11回	48	927・928	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	にぶい褐色 にぶい褐色 褐色 褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	21.6	—	5.9 第三回 外壁に墨跡 内壁に墨跡
第11回	49	1161	F-2区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/6 2.5196/7	褐色 にぶい褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	14.8	—	6.7 第三回 外壁に墨跡 内壁に墨跡
第12回	50	1254	G-2区 II層	重	口縁部 ～側面	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/6 2.5196/7	褐色 にぶい褐色	ナゲナゲ・ナゲ	—	—	6.7 第三回 42回・同一・側体
第11回	51	377	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/6 2.5196/7	褐色 にぶい褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	17.6	—	1.8 第三回
第12回	52	371	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/6 2.5196/7	褐色 褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	16.6	—	9.8 第三回
第12回	53	376・394 804	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/6 2.5196/7 2.5196/8	褐色 褐色 褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	15.6	—	6.5 第三回
第12回	54	430・439 444	J-4区 II層	重	口縁部 ～側面	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/6 2.5196/7 2.5196/8	褐色 褐色 褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	15.3	—	7.3 第三回
第12回	55	374・381 386・385	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/6 2.5196/7 2.5196/8	褐色 褐色 褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	15.5	—	4.0 第三回 埋入部に墨跡 2面
第12回	56	929・944	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	—	—	2.7 第三回
第12回	57	1048・1049	H-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	—	—	3.5 第三回 2次の三共発見
第12回	58	973	I-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	—	—	6.2 第三回 内壁に墨跡 2次の三共発見
第12回	59	472	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	褐色 褐色 褐色 褐色	ナゲナゲ	—	—	3.9 第三回 内壁に墨跡 4次の二共発見
第12回	60	930	I-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/6 2.5196/7 2.5196/8	褐色 褐色 褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	—	—	3.7 第三回 2次の二共発見
第12回	61	327	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色	ナゲナゲ	—	—	3.9 第三回 2次の三共発見 内壁に墨跡
第12回	62	922	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	—	—	4.5 第三回 内壁に墨跡
第12回	63	450・452	I-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	—	—	4.9 第三回 3次の三共発見
第12回	64	3	B-2区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	褐色 褐色 褐色 褐色	ナゲナゲ	—	—	4.0 第三回 2次の三共発見
第12回	65	995・996	I-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4 2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色 にぶい褐色	ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ ナゲナゲ・ナゲ	—	—	4.1 第三回
第13回	66	278・289	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/6 2.5196/7 2.5196/8	明る褐色 明る褐色	ナゲナゲ・ナゲ	—	—	7.8 第三回 内壁に墨跡 42回・同一・側体
第13回	67	312	J-4区 II層	重	口縁部	弥生土器	壺	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/5 2.5196/6 2.5196/7	明る褐色 明る褐色	ナゲナゲ・ナゲ	—	—	6.5 第三回 42回・同一・側体
第13回	68	218	F-1区 II層	重?	口縁部	弥生土器?	壺?	○	○	○	○	○	○	○	2.5196/4	にぶい褐色	ナゲナゲ	—	—	4.1 第三回 内壁に墨跡

第8表 穴倉遺跡 弥生土器 壺(底)1~4類 土器観察表

擇別 番号	番号	注記 番号	出土区 出土層 (遺跡)	形態	部位	分類	胎 土						色 調	施文・調査 上段：外面 下段：内面	法量 (cm)	備考	
							古	新	中	粗	細	中					
第13回	49	449	J-4区 Ⅲ層	壺	口部附近	弥生土器	○	○		○	○	○	DY86/6	褐色	ナダ	-	6.2 5.3
第13回	76	758-758	I-4区 Ⅲ層	壺	口部附近	弥生土器	○	○		○	○	○	2,735/6	にじいろ褐色	ナダ	-	6.1 2.2
第13回	71	569	I-4区 Ⅲ層	壺	口部附近	弥生土器	○	○		○	○	○	7,335/4	にじいろ褐色	ナダ	-	6.1 2.2
第13回	72	225	J-1区 Ⅲ層	壺	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	7,376/6	褐色	ナダ・ナダ褐色	-	6.4 4.5
第13回	72	391	J-4区 Ⅲ層	壺	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	1095/3	にじいろ褐色	ナダ	-	6.0 5.4
第13回	24	271	K-4区 Ⅲ層	壺	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	7,335/2	にじいろ褐色	ナダ・ナダ褐色	-	6.9 1.7
第13回	75	514-785	I-4区 Ⅲ層	壺	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	7,335/6	褐色	ナダ	-	6.4 8.6
第13回	76	495-499-500 500-500	I-4区 Ⅲ層	壺	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	DY86/6	褐色	ナダ	-	6.0 11.8
第13回	77	1000-1019	H-4区 Ⅲ層	壺	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	1095/3	にじいろ褐色	ナダ	-	2.4 2.2
第13回	78	1049	H-4区 Ⅲ層	壺	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	7,335/4	にじいろ褐色	ナダ	-	2.0 2.6
第13回	79	1049-1050-1051 1054-1054-1055 1056-1056-1057	G-4区 Ⅲ層	壺	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	7,335/6	褐色	ナダ褐色	-	1.9 4.3
													7,898/6	褐色	ナダ・ナダ褐色	-	

第9表 穴倉遺跡 弥生土器 鉢1~3類 土器観察表

擇別 番号	番号	注記 番号	出土区 出土層 (遺跡)	形態	部位	分類	胎 土						色 調	施文・調査 上段：外面 下段：内面	法量 (cm)	備考	
							古	新	中	粗	細	中					
第13回	80	923	J-4区 Ⅲ層	鉢	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	7,335/4	にじいろ褐色	ナダ・ナダ褐色	-	26.7 - 5.8
第13回	81	925-975	H-4区 Ⅲ層	鉢	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	7,335/2	褐色	ナダ・ナダ	-	23.7 - 2.2
第14回	82	1202	G-1区 Ⅲ層	鉢	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	1095/2	にじいろ褐色	ナダ	-	2.0 1.8
第13回	83	388	J-4区 Ⅲ層	鉢	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	7,335/4	褐色	ナダ	-	18.3 - 1.2
第14回	84	1143	H-4区 Ⅲ層	鉢	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	7,335/6	褐色	ナダ褐色	-	1.7 0.7

第10表 穴倉遺跡 弥生土器 高坏1類 土器観察表

擇別 番号	番号	注記 番号	出土区 出土層 (遺跡)	形態	部位	分類	胎 土						色 調	施文・調査 上段：外面 下段：内面	法量 (cm)	備考	
							古	新	中	粗	細	中					
第14回	85	925	J-4区 Ⅲ層	高坏	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	2,735/5	洪水褐色	ナダ・洪ナダ	-	29.2 - 7.9
第14回	86	203	F-3区 Ⅲ層	高坏	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	7,335/2	褐色	ナダ・洪ナダ	-	- 1.3

第11表 穴倉遺跡 弥生土器 大甕1~3類 土器観察表

擇別 番号	番号	注記 番号	出土区 出土層 (遺跡)	形態	部位	分類	胎 土						色 調	施文・調査 上段：外面 下段：内面	法量 (cm)	備考	
							古	新	中	粗	細	中					
第14回	87	462-463-464 507-508-509	I-4区 Ⅲ層	大甕	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	7,335/6	褐色	ナダ・ナダ	-	21.8 - 10.3
第14回	88	548	I-4区 Ⅲ層	大甕	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	7,335/5	褐色	ナダ	-	24.8 - 6.9
第14回	89	463-467	J-4区 Ⅲ層	大甕	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	2,735/5	洪水褐色	ナダ・ナダ褐色	-	21.4 - 10.6
第14回	90	960	I-4区 Ⅲ層	大甕	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	2,735/6	褐色	ナダ・ナダ	-	24.9 - 4.1
第14回	91	725-865	J-4区 Ⅲ層	大甕	口部附近	弥生土器							SV86/6	褐色	ナダ・ナダ	-	21.7 - 5.3
第14回	92	923	J-4区 Ⅲ層	大甕	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	SV96/6	褐色	ナダ	-	28.0 - 7.9
第14回	93	134	F-1区 Ⅲ層	大甕	口部附近	弥生土器	○	○	○	○	○	○	7,335/6	褐色	ナダ	-	- 4.2

第12表 穴倉遺跡 弥生土器 小型土器1・2類 土器観察表

査定番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	筋 土						色 調	施文・調査 上段: 内面 下段: 内面	底量 (cm)	備考		
							セ	ミ	タ	リ	シ	ウ						
第14回	94	1110-3223	G-4区 Ⅱ層	小口瓶	山腹部	低生土器	○						○ 7.5786/4	にぶい褐色	ナヅ	4.1	-	3.8 小型土器1類
第14回	95	1108	G-4区 Ⅱ層	小口瓶	斜面~底部	低生土器	○	○	○	○	○	○	○ 7.5786/4	にぶい褐色	ナヅ・内面無地	-	1.6	3.8 小型土器2類

第13表 穴倉遺跡 成川式土器 土器観察表

査定番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	筋 土						色 調	施文・調査 上段: 内面 下段: 内面	底量 (cm)	備考		
							セ	ミ	タ	リ	シ	ウ						
第15回	96	1215-3224	G-3区 Ⅱ層	束	口縁部	成川式土器							○ 5786/6	褐色	ナヅ・ナヅ	26.3	-	16.1 外面に復付有
第15回	97	107-725-722	I-4区 Ⅱ層	束	口縁部	成川式土器							○ 7.5786/4	にぶい褐色	ナヅ	21.5	-	4.8 外面に復付有
第15回	98	216	F-1区 Ⅱ層	束	口縁部	成川式土器	○	○	○	○	○	○	○ 7.5786/6	褐色	ナヅ・ナヅ	11.6	-	3.6 外面に復付有
第15回	99	37	E-1区 Ⅱ層	束	口縁部	成川式土器							○ 7.5786/4	にぶい褐色	ナヅ・ナヅ	-	-	4.7 外面に復付有
第15回	100	22-33	E-1区 Ⅱ層	束	口縁部	成川式土器							○ 7.5786/6	褐色	ナヅ	-	10.4	7.4
第15回	101	695-596 695-597 695-598 700-701-702 700-703-704 700-705-706 700-707-708 700-709-710	I-4区 Ⅱ層	束	口縁部~底部	成川式土器							○ 2.5786/4	にぶい褐色	ナヅ	8.3	9.8	内面に風痕
第15回	102	1182	G-4区 Ⅱ層	束	口縁部~底部	成川式土器	○						○ 7.5786/6	にぶい褐色	ナヅ	-	-	外面上に風痕
第15回	103	82	H-1区 Ⅱ層	束	底部	成川式土器							○ 10786/4	褐色	ナヅ・ナヅ	-	5.6	4.6 外面に復付有
第15回	104	220	F-1区 Ⅱ層	束	完形	成川式土器	○						○ 7.5786/4	にぶい褐色	ナヅ・ナヅ	-	3.4	3.5 ミニチュア土器
第15回	105	267	J-1区 Ⅱ層	外	口縁部	成川式土器	○						○ 7.5786/4	にぶい褐色	ナヅ	10.8	4.3	7.1 外面に凹痕
第15回	106	79	E-1区 Ⅱ層	外	口縁部	成川式土器							○ 2.5786/6	褐色	ナヅ	26.1	-	3.3 内面に風痕
													○ 7.5786/6	褐色	ナヅ	6.6	-	3.7

第14表 穴倉遺跡 内黒土器 土器観察表

査定番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	筋 土						色 調	施文・調査 上段: 内面 下段: 内面	底量 (cm)	備考		
							セ	ミ	タ	リ	シ	ウ						
第15回	107	408	J-4区 Ⅱ層	鉢	口縁部	内黒土器	○	○	○	○	○	○	○ 7.5786/6	褐色	ナヅ	28.1	-	5.7
第15回	108	1857-1359	G-4区 Ⅱ層	鉢	底部	内黒土器							○ 6786/6	褐色	ナヅ	-	8.6	8.8

第15表 穴倉遺跡 陶器 土器観察表

査定番号	番号	注記番号	出土区 出土層 (遺構)	器種	部位	分類	筋 土						色 調	施文・調査 上段: 内面 下段: 内面	底量 (cm)	備考		
							セ	ミ	タ	リ	シ	ウ						
第15回	109	-	-	-	朱塗?	蓋	圓錐 (底部)						○ 7.5786/2	朱褐色	ナヅ・ロクナヅ	8.8	6.6	2.4 高脚 高柄丸

第16表 穴倉遺跡 II層出土石器 計測表

査定番号	番号	注記番号	出土区	出土層 (遺構)	器種	部位	分類	石質						施文・調査 上段: 内面 下段: 内面	底量 (cm)	備考
								山田	武井	高橋	山田	高橋	山田			
第10回	410	229	X-4区	Ⅱ層	石器			安山岩			1.45	1.55	0.7	0.7	-	-
第10回	411	763	J-4区	Ⅱ層	石器	磨		砂岩			10.1	3.2	3.4	129.73	細孔	-

第IV章 調査のまとめ

はじめに

穴倉遺跡は農村総合整備事業有明地区に起因する農道11号中方限線の農道整備事業により全面調査を実施した遺跡である。農道11号中方限線は平成9年度において280m部分、平成15年度に422.25m部分の全面調査を行った。平成15年度に全面調査を行った422.25m部分は「穴倉B遺跡」として平成19年度に報告書作成がなされている。

第1節 遺物

土器は第III章で述べたとおり主に弥生時代の甕・壺類を中心とした土器群が出土し、その分類を器種毎に細かい基準を設けた。その分類の結果から、甕は全体的な特徴として口縁部が「く」の字状に外反若しくは立ち上がりが強く、比較的胴部の張りが顯著ではないことが特徴的であり、松木蔭式土器に比定すると思われる。また壺は口縁部が二叉状口縁を呈するもの（壺1類）、大きく外反するもの（壺2類）、緩やかに外反するもの（壺3・4類）と分かれる。「口縁部が二叉状口縁を呈するもの（壺1類）」「大きく外反するもの（壺2類）」は山ノロII式土器の特徴をもつものであるが、「緩やかに外反するもの（壺3・4類）」は松木蔭式土器の特徴をもつものである。従って今回の調査において出土した弥生土器は弥生時代後期から終末期にかけてのものと考えられる。また壺6類は重弧文や平行沈線文は見られないが、胴部の形状が算盤玉状の特徴から免田式土器に比定されると思われる。また成川式土器について、甕は「く」の字状の口縁部が直行し、比較的短頸である。また頸部に貼付突帯が見当たらない特徴から中津野式土器に否定されると思われる。

第2節 遺構

今回の調査ではⅢ層上面で遺構が検出された。検出遺構は掘立柱建物1基、土坑1基、柱穴17基であり、調査面積に対して比較的遺構密度が疎である。E-1・2区で検出された掘立柱建物1の柱穴からは高坏（87）が出土したことは第III章で述べたとおりであるが、この高坏は前節で述べたとおり弥生時代後期頃の器形の特徴をもち、松木蔭式土器に比定されるものと思われ、弥生時代後期から以降に使用された可能性が高い。

平成15年度調査成果（穴倉B遺跡）との遺物・遺構分布の傾向

今回成果報告を行った「穴倉遺跡」、平成19年度に成果報告を行った「穴倉B遺跡」は「周知の遺跡」である「穴倉遺跡」（69-117）の範囲内での調査を行ったものである。平成19年度の成果報告では、包含層が削平を受けていたため、弥生時代・古墳時代の遺物は確認されず、アカホヤ層上面より掘り込みの浅い掘立柱建物が9基確認されている。アカホヤ層上面で確認された掘立柱建物は南南東軸・南南西軸の2時期に別れ、今回報告された掘立柱建物1は南南西軸に符合し、同時期に使用された可能性も否めない。これらのことから、「穴倉遺跡」（69-117）全体に、弥生時代後期から以降の遺構群が広がっている可能性がある。

【参考文献】

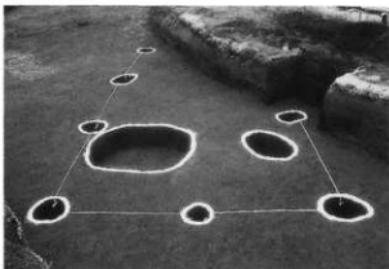
- 『鹿大考古 第6号 成川式土器再考』 中村直子 1987 鹿児島大学考古学会
- 『日本土器辞典』 大川 清・鈴木公雄・公楽善通 1996 雄山閣
- 『王子遺跡』 立神次郎 1985 鹿児島県教育委員会
- 『大島遺跡』 宮田栄二・平小塙秀男 2005 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 『堂園遺跡B地点 堂園遺跡A地点(追加調査)』 八木澤一郎・池畠耕一・吉井秀一郎・馬籠亮道 2008 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 『浜町遺跡』 青崎和憲 2000 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 『下堀遺跡・大崎御山田段遺跡』 内村憲和 2005 大崎町教育委員会
- 『御里窯跡』 石一之 2003 加治木町教育委員会
- 『仕明遺跡』 中水忍・出口順一朗・堂込秀人・前迫亮一・横手浩二郎・和田るみ子・東徹志 2005 有明町教育委員会
- 『上苑A遺跡・穴倉B遺跡』 出口順一朗・東徹志・中水忍・中村直子・内山伸明 2008 志布志市教育委員会

図 版

図版1 穴倉遺跡 全面調査



III層上面検出遺構 完掘状況



掘立柱建物1・土坑1 完掘状況



土層断面



鉢(106) 出土状況



II層遺物出土状況 1



発掘調査 作業風景 (掘り下げ作業)



II層遺物出土状況 2



発掘調査 作業風景 (検出面精査作業)

図版2 穴倉遺跡 弥生土器 1



36



37



75



76



79



38

95

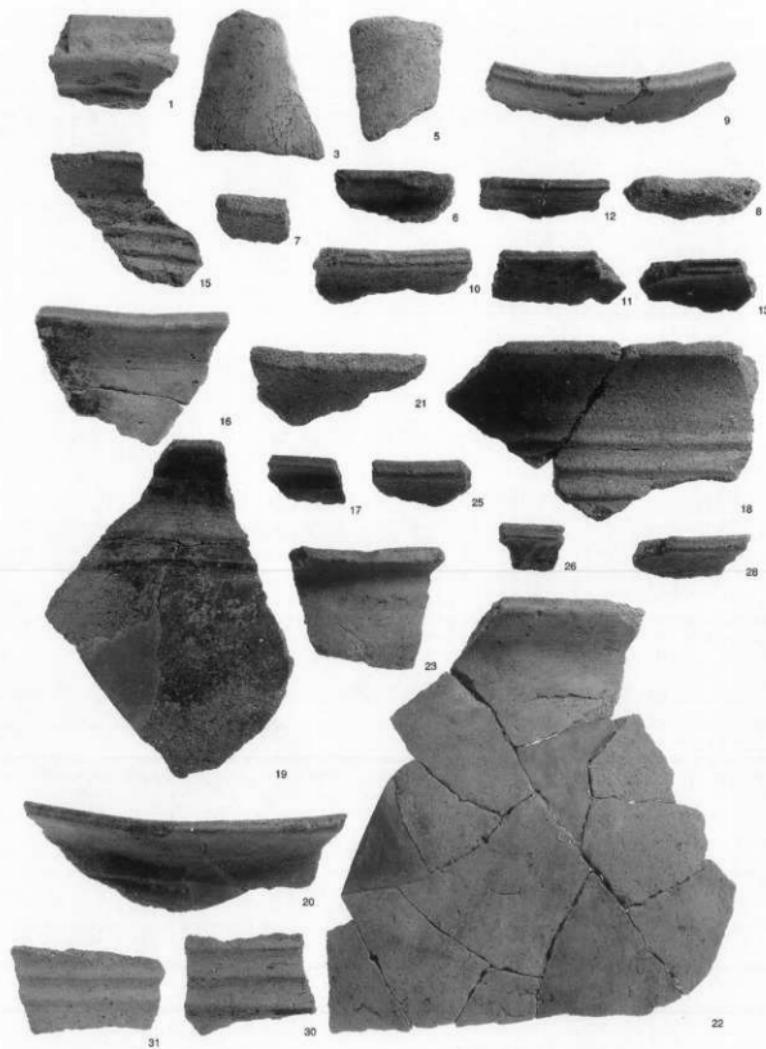


87

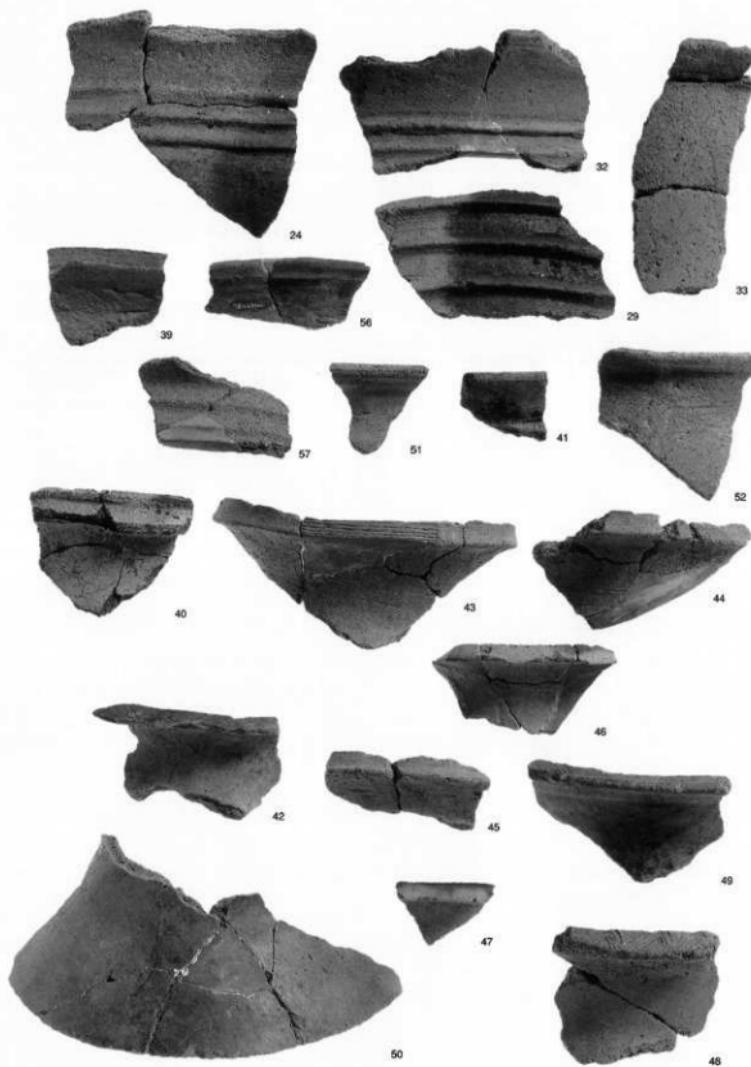


88

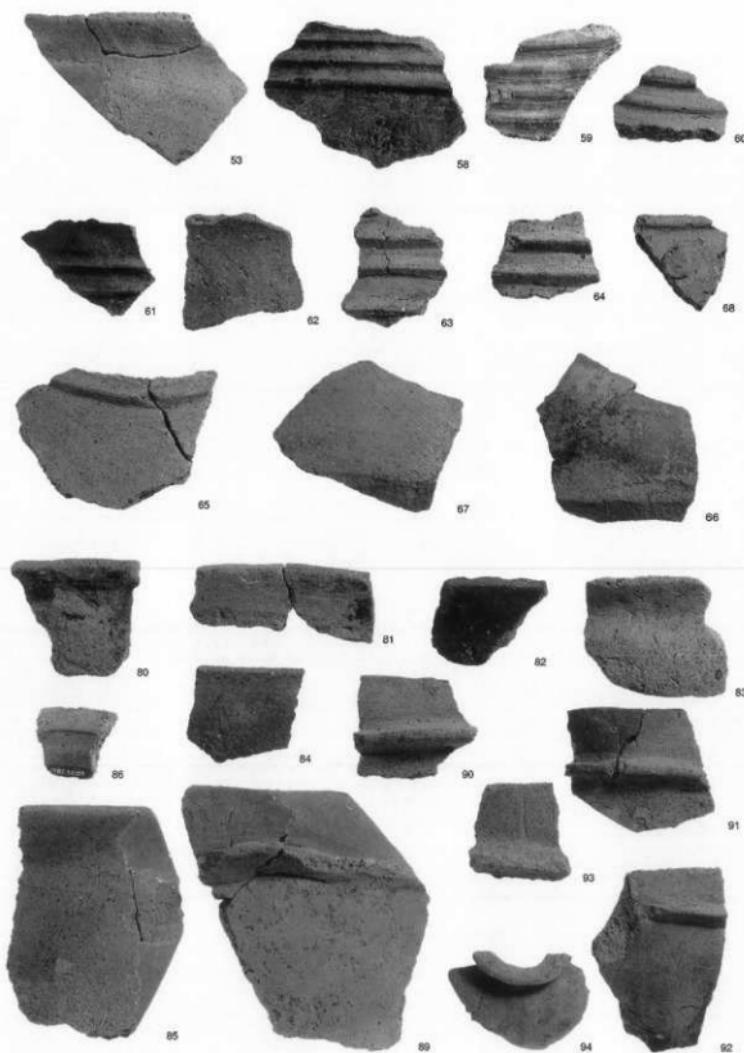
図版3 穴倉遺跡 弥生土器 2



図版 4 穴倉遺跡 弥生土器 3



図版 5 穴倉遺跡 弥生土器 4



図版 6 穴倉遺跡 成川式土器・内黒土器・陶器



101



104



103



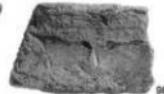
100



96



97



98



105



107



111



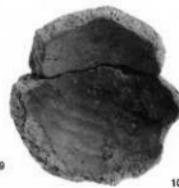
99



106



109



108



110

報告書抄録

終わりに

本遺跡は、事業担当課との意思疎通が図られず、工事ストップをかけてイレギュラー的に全面調査を実施せざるを得ない現場であったため、満足に工期も取れずに実施されたことが残された図面や写真に当時の担当者の労苦が伺われました。正月も明けて間もないかなり寒い時期で、本当に大変だったと思います。

さらに、この調査報告も以後の事業量の爆発的な増加、発掘調査の前倒しや報告書作成の優先順位のために、調査から10年を経過してからの報告書作成になってしまったため、当時の情報や記憶の風化により、報告書の記載にかなりの不備があることは否めません。

また現場写真に写っていた作業員さんの中には、今は故人となられた方もおり、年月は無常なものであると痛感させられます。

発掘調査・報告書作成など、私が埋蔵文化財に携わるようになって、10年目に入ろうとしていますが、これまでに支えてくれたみなさんことを、この頃富みに思い返すことが多くなりました。生きていく上でたくさんの人たちと関わって、同じ環境の中で労苦を分かち合った友がいて、今生きている自分がある。本当にありがとう。

(J. D)

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

穴倉遺跡

発行日：2009年3月31日

発行：鹿児島県志布志市教育委員会

〒899-7192 鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目1番1号

Tel 099-472-1111

印刷所：西文社印刷株式会社 志布志支店

〒899-7103 鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目16番21号

Tel 099-471-1328